占拠の論理

擬制への総反逆の根拠地とせよ

関西大学生活協同組合〈書評〉編集委員会

二〇世紀後半の世界は、激しく動揺し解体し再編の鼓動の振幅をより波状的に拡大している。そこでのわれわれの価値基準は〝パニック〟〝転倒〟として現出している。そこに、自己が諸現象に対しての行為＝実践の意味を社会的基底との関係で真摯に把握するものとして、自己と現在との問いが不問にされている。過渡的歴史の現在、大学闘争そのものは、「教育の不在」を嘆く知識人、あるいは「大学を革命の手段にしようとしている」といきまいている人たちにおいても、大学闘争が何をめざし、どのように闘かわれているかは、ほとんど何も知っていない、というのが現状だろう。それぞれが現在との問いを不問にし、自己の既成の価値判断において「勝手」に発言しているにすぎないのではなかろうか、まさしく現在＝歴史に復讐されているといえよう。大学闘争が〈学問〉〈思想〉〈国家〉への問い、それは自己否定の内的論理を媒介に、〈現在とは何か〉を、白日の下に展開している。われわれの未来への創出を射程内においた現在＝歴史の奪還闘争であるといえよう。

この一月、京大・関学闘争において、羽仁五郎氏は、密封されている社会の暗黒を告発した。氏は「占拠」が擬判の学問・思想・概念からの解放、まさしくそれはしのびよるファシズムへの闘いばかりでなく、全人民の解放への展開可能の〈核〉である、と講演した。われわれ関西大学生協「書評」編集委員会は、そこに歴史＝現在への問いの果敢な衝激力をみ、学生・労働者、あるいは高校生・住民が、〈現代〉を解明し、〈運動〉を展開するために、羽仁五郎氏の講演が提起した問題の真摯な討議・確認を期待し、関西における氏の講演を責任編集し、発行する次第である。

目次

3　占拠から出発せよ
（一月二一日　全関西学生総決起集会　於京大教養部前）

11　国家・大学を解体せよ
（一月二二日　関西学院全共闘主催　「自主講座」）

27　大学の根源的本質とは何か
（「関西大学新聞」　四二年六月一五日号）

37　座談会
「羽仁五郎氏を囲んで」
大学闘争・反戦闘争・万国博・高校闘争

占拠から出発せよ

大学の主体は誰か

大学の改革を誰がやるのかということはもう明らかになってきたんですね（「異議なし」）。もちろんあの佐藤とか坂田とかいうのは大学を改革しようなどとツメのあかほども思っていないのは明らかなことです。それから大学当局はね、改革しなければならないということは知っているけれども、しかし改革する実力は絶対ないんです（「異議なし」）。それは何より証拠には東大の加藤君というのが大学の確認書というのをやったんだね。その確認書というのはたちまち一枚の反古になってしまったんだ（「異議なし」）。

で今京都大学では奥田学長が何をしようとしているかというと加藤君がやったのと同じことをしようとしているんだよな。なぜそうかといえば、大学が大学ではないということはねもう何十年も前から解っていることなんだ（「異議なし」）。げんに京都大学にしても東京大学にしてもどういう学生を送りだしていたのかといえば佐藤栄作だの坂田だのああいうものを送り出していたのだ（「異議なし」）。で今の大学生は何になるにしてもああいうものだけにはなりたくないと思っているのだ（「異議なし」）。今の京都大学の奥田学長にしてもこの点をよく考えてもらいたいんだな。民青の諸君もその点よく考えてもらいたいと思う（「異議なし」）。大学が改革されなければならないということは今日誰も認めているよ。おそらく佐藤栄作のようなものでさえ認めているだろうと思うんだ（笑）。現在の大学は改革しなければならないということは日本国中の人誰でもが認めている。

そればかりじゃない世界の問題になっているんだ。世界の大学が改革されねばならないということを。世界の大学が、東大や京大や日本大学ばかりじゃないんだよ。アメリカの大学でもイギリスの大学でもみんな改革しなければならないという土壇場に来ているんだよ。それを誰が改革するのかということが問題なんだ。まず大学当局には全然改革の能力がないということは明らかなんだよ（「異議なし」）。

何故か。能力があるならとっくに改革してる筈だよ。また日本の政党、僕が長年支持してきた共産党にしたってだ（「賛成」）。それが大学改革の能力があるならとっくにやってる筈だ（「異議なし」）。ないんだよ。まあ、いちばんあれいえば、僕にだってないんだよ。ね、それは個人的に改革出来る問題じゃないんだ（「異議なし」）。ただこれを改革するのは学生自身の手によるほか改革出来ないんだ。しかも学生がどういう方法で改革するのかといえば、大学と話し合ってみるなんていうのはナンセンスだよ、これは（「異議なし」）。これはもう何度やってみたかわからないんだ。協議だとか五者協議

だとかいうようなことはもう耳たこができるほどやってきたんだ。各学部の学生大会をやってその決議をもって学校当局と交渉するなんてことは何度やってきたかわからないんだよ。それが一つでも効果のあったことがあるのか。

現にこの間東大では封鎖を解除しろうとそして五学部だか知らないが、その学生大会に基いて加藤代行と確認書を作ったけれども、それは何の役にも立たないじゃないか、ね。だから大学を改革する実際の力は学生以外にはない。そしてその方法には封鎖以外にはないということは明らかなんだ（「異議なし」）。封鎖がとかれた東京大学がどういう大学になっていくかということは今予言しても決して間違いないよ。もとの通りの東京大学になっていくんだよ（「異議なし」）。

だから東京大学の前例がどういう点で京都大学が学ばなければならないかということは封鎖を解いたら学校はまた古い大学に戻ってしまうということだよ。いや少しでもよくなるかも知れない、と思ってる人があるとしたら、とんでもない間違いだ。大学の改革を根本的に改革して新しい大学を作るなんていうのはそんな話じゃないんだよ。大学の中のほんの一寸した改革をやろうとしたって、それが絶対に出来ないってことなんだよ。それは奥田学長が何よりもよく知っているだろうと思うんだ。奥田学長だってあんまり酷いところは改革しようと思っては何度やったかわからないだろう。しかし絶対に出来なかったんだよ。だから彼が、今ね封鎖を解けと、そしたら話し合って改革の方法をたてようなんてことを、彼がようく考えてみれば、いかにナンセンスかってことが彼自身ようく解るはずです。これが第一点だ。大学を誰が改革するのかということだ。僕は誰だっていいや、能力のある人が改革すればいいと思うんだ。奥田君にやれればやってみたまえ、やれやしないんだから。文部省がやれる筈がないじゃないか。教授会が出来るかと、僕は忌憚なくいうが現在の京都大学の教授諸君が、こないだの戦争に反対出来たかっていうんだよ。

こないだの戦争に反対出来なかったような教授は学生の前で発言権はないんだよ（「いいぞー」）。学生は今戦争が三度起こることを防ごうとしているんだが、第二次世界大戦を防げなかったような大学に何の信頼も持つことは出来ないんだよ、客観的に。

だから、大学をほんの少しでも改革して少しでも大学らしい大学にするには絶対に封鎖を解くことは出来ない。封鎖を解いたら大学改革のあらゆる根拠が失われてしまうんですよ。封鎖を解いた学生はいくら話しあいに応じなくてもその話し合いの結果は一つも実行できやしない。むしろ現在の自民党の政府なりいわゆる日経連とか経団連の考えていることは今までの大学よりももっと自民党政府や独占資本の言うことを聞く大学を作りたくてしようがないんだ（「異議なし」）。

だから他の点では丁度今労働組合がそういう目に合わされているように経済的な要求はきいてくれるかもしれないんだ。しかし本質的な要求は絶対に聞かない。むしろそれは全く剝奪されてしまうんだ。この大学の問題を見て、現在日本の労働階級もそろそろ考えだすべき時期に来ていると思うんだ。

大学の学生がやっているようなことを日本の全国の労働階級もや

るべきなんだよ。また東京大学が闘った闘い方がいいだか悪いだかという問題じゃない、日本全国の国立大学の学生が東大と同じような闘いをやるべきなんだ（「異議なし」）。そうすれば万事はただちに解決するんだよ。なんにも困難なことはありゃしない。大学を改革するのに学生の主力によって解決しようということなんだ。この、大学を改革しようという誰が見ても必要な問題を政府なり大学当局なりは絶対に改革できない。少しでも大学を大学らしいものにするためには学生が大学を占拠する他にはないんです。これが第一点だ。

機動隊はゲシュタッポだ

第二点にね、今あそこで盛んに言っているような、「京都大学の問題は京都大学で解決する」なんていう（「賛成」）どうしてそんな馬鹿気たことが言えるんだ。東京大学は東京大学の問題を東京大学の手で解決できなかったじゃないか。京都大学が京都大学の問題を自分で解決できるなんていうことを、一片の良心があるなら、絶対に言うことをやめるべきだよ。大学は京都大学だとかあるいは日本の国だとかいう、そういう個別的な考え方で解決できる問題じゃないんだよ。

大学は国民のものなんだ。大学は学生のものなんだ。一つの大学で起っている問題は日本の全大学の問題なんだよ。自分の家が燃えているのにだ、よその人は入らないでくれと、俺の家の火事は俺が消すなどという馬鹿がいるかい。京都大学は燃えていると、全日本の学生及び日本の国民はこれを消す手を貸してくれというのこそ本当の良心的な訴えではないのか（「異議なし」）。

一つの大学に東京大学に機動隊が入ったってことは日本の全大学の問題だよ。機動隊ってのは警察じゃないんだよ。あれはゲシュタッポだよ（「異議なし」、拍手）。警察ってのは法律に基いて行動するんだ。機動隊法って法律が何処にあるんだい。機動隊ってのは警察という皮をかぶったナチスですよ、ファシズムです。それが大学に入ったということを国民が許す筈がないんだ。問題が解ればね。

なぜなら今日東大に入った機動隊は明日京都大学の学生がどんなにおとなしくしても改革の要求を捨てない限り、必ず機動隊は京都大学に入るよ（「異議なし」）。おとなしくするかしないかとは関係がないんだよ。現に日本国民はずいぶん長いことおとなしくしてたんだよ。日本国民ぐらいおとなしい国民はありゃしなかったんだ。そのおとなしい国民がどんな目に会わされているか、誰だって知っているじゃないか。

こないだの戦争に反対したために日本国民はあんな目になったのか。そうじゃないよ。こないだの戦争に反対しなかったためにあんなことになったんだ。国民が反対しなければ軍部も反省するか、そんな馬鹿なことがあるか。

警察機動隊は何につながっているのかと、警察機動隊は道路交通取締りなんかやる警察じゃないんだよ。要するに独占資本の護衛隊なんだ。大学を独占資本の大学にするために機動隊は大学に入るんだよ。東大に機動隊が入ったってことは絶対に許せない。これは日本が全体が火事にもなるってことなんだ。東大が燃えてきてるってことは隣りの大学が燃えてくるってことなんだ。日本全国の大学が機動隊の下におかれるってことなんだ。ほんの一寸した改革でもそれをあ

くまで要求すれば占拠せざるを得ない。占拠すれば機動隊は入る段取りになってんじゃないか。それならほんの一寸した改革の要求も捨てなきゃならないということになるんだよ。どこまでいけば機動隊が入ってくるかじゃないんだ。ほんの一寸した改革でも要求すりゃあ、やあっと機動隊が入ってくる始りなんだよ。機動隊が入ってくるってことを恐れる人達は京都大学の幹部の中にはいるようだが、それは改革を恐れるということだよ。ほんのちょっとした改革でもやろうと思うなら機動隊はもうその時に入ってくるんだよ。どの程度までの改革をやれば入ってくるかなどという程度の問題なんかじゃない。

現在の大学を少しでも大学らしいものにしようとする途端に全機動隊は待機してるんだ。どういうふうにしたら機動隊が入らないかっていやあね大学が独占資本の大学になりゃあ絶対に入ってこないよ。だから奥田君なり京都大学の教員諸君は機動隊を入れたくないと考えるなら京都大学を独占資本の大学にしたまえ（「そうだ、そうだ」）。そうすりゃ絶対に機動隊は入らないよ。

京都大学を一寸でも改革しようとするならば機動隊が入ることを許さないという態度をたてなけりゃ、一寸した改革だって出来やしないぞ。右の物を左に移すだけの改革も絶対出来ない。これが第二点であります。

占拠の思想

第三点はね、現在東京大学あるいは京都大学あるいは日本大学、あるいは全国の大学で大学を占拠することによって大学を改革しようとしている学生の理論と実践とは実に長い間の理論と実践との総決算なんだ（「そうだ」）。

こりゃあ学生必ずしも自覚していないほどに歴史的な必然なんだよ。これは一寸した考えでやろうと思って一寸した思いつきでやっていることじゃないんだよ。他に方法がないからなんだ。その証拠には日本全国の大学、のみならず国際的に世界のあらゆる大学が同じことをやっているじゃないか。どうして同じことをやるんだ。これは何も日本大学の学生がロンドン大学へ行ってやってる訳じゃないんだよ。他の大学の人がロンドン大学に入ってきたからロンドン大学は占拠してるんじゃないんだ。

ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスなんていうねこの京都大学の教授たちもロンドン・スクール・オブ・エコノミックスなんていうのはずいぶんいい大学だと思っているのだろう。そのロンドン・スクール・オブ・エコノミックスがこの間学生が占拠しているじゃないか。それはなにも東大の学生や日大の学生がロンドン・スクール・オブ・エコノミックスに行ったんじゃないんだよ。同じ問題があるからだ。そして解決の方法が一つしか無いから、それが全部一致するんだよ。

そして去年のアメリカのカリフォルニア大学だったかな、あすこで大学の学生がカリフォルニア大学を占拠した。三つの理由で占拠したんだ。第一は大学が戦争に協力することは許せないということなんだよ。今カリフォルニア大学だけじゃない、京都大学の教授中に最後まで戦争に協力しないと決意している教授が何人いると思う

んだ（「いない、いない」）。戦争になっていくと、結局協力するような教授しかいないんだよ。

第二は、カリフォルニア大学の場合には人種差別をやるような大学には絶対反対だっていうんだ。最後にカリフォルニア大学を学生が占拠した理由は、大学に警察を入れるような大学は学生が占拠するというんだよ（「異議なし」）。しかもこのカリフォルニア大学の占拠についてだ、アメリカの大学はこれは客観的にはいったいどういう問題なんだという調査をやったんだ。その調査を他の大学に依頼してだよ、学外の大学に依頼したんだよ。京都大学なんかも学外の大学に依頼した方がいいんだよ。ハーバード大学のコックスという教授だ。しかもこれは今までアメリカの連邦検事総長をやっていたという人なんだからね、あんまり進歩的な人じゃないんだ。

このコックス報告というのがこないだ出たよ。その一番始めに何と書いてあるかというと、「現在の学生は」、ーというのは大学を改革しようとして占拠している学生はー、「この国が初めてもった最も知的な最も理想主義的な最も政治的な感覚の鋭敏な、しかも最も優秀な政治的戦術を持った世代である」、と云ってるんだよ。

今京都大学を占拠しようとしている学生は日本が持った、今まで持つことの出来た、最も知的な最も理想主義的な、最も仕会問題に鋭敏な、そして最も優秀な戦術を持った世代なんだよ。これに奥田君がかなうはずはないんだよ。それに京都大学の教授連がかなう筈がないよ。奥田君や京都大学の教授は日本が今まで持った最も知的な学長でもなければ最も知的な教授でもないんだよ。コックス報告はそういう風にはいってないんだよ。俺が云うんじゃない、コックス報告が云うんだよ。これは学長も教授もよく反省した方がいいんだ。現在占拠しようとしている学生は最も優秀な学生だ（「異議なし」）。それより他に大学の改革の根拠手段はないんだよ。だから奥田総長も教授団もこの今占拠している学生を支持すべきです。

そして大学に機動隊を入れようとする公安委員会なり政府に向って学長が先頭に立って、学生の大学占拠を抗議者として、大学改革案を実行するより絶対に他に方法はない。この日本の機動隊がゲシュタッポになっているということは世界的な問題なんだ。

去年のアメリカの民主党の大会の時にね、シカゴの大会の時にシカゴの警察とデモをする学生たちと衝突したね。あれについてもアメリカでは大統領が特別調査委員会を任命してその報告がこないだでたよ。その報告になんと云っているかというと「今日の警察は即ち彼等がこそゲシュタッポだ」と云っているんだ。アメリカの大統領の任命した委員会の調査の結果の報告が、シカゴの警察はゲシュタッポだと云ってるんだ。警察も乱暴だがデモの学生も乱暴だなんていうそんなケンカ両成敗じゃあないんだ。そうじゃなくて現在のアメリカの警察がすでにゲシュタッポになっている。

日本の警察も同じようにゲシュタッポになっているんです。今日大学に入ってくるゲシュタッポは明日労働組合に入ろうとしてるんだよ。その次には日本共産党にもゲシュタッポが入ってくるに決ってるんだ。だから今民青なり日本共産党は大学が学生によって占拠されることを、共産党も民青も絶対に支持すべきだよ（「異議なし」）。そうでなければ明日共産党や民青が機動隊に蹴散らされるということは火を見るよりも明らかです。そればかりではない。日本全国民

が機動隊に蹴散らされるんだ。そしてどこへ連れてゆかれるか分らないんだ。この三つの点はどっからみても間違いないと思う。もし間違ってると思う人があるなら僕を弁駁してもらいたいんだ。

大学を改革するのに学生以外に誰が改革できるかと。その改革する方法としては占拠以外にどんな方法があるかってんだ。そこへ入ってくる機動隊は警察じゃない。あれは無法の暴力です。暴力というなら機動隊こそ暴力だ。学生が団結して占拠している力は絶対に暴力じゃない。それは大学を改革する唯一の方法なんだ。この占拠の方法については頭のない人間には分らないんだよ、事実ね。分らない奴は分らないってことを率直に告白した方がいいんだ。自分の分らない問題に暴力って名前をつけるのはやめたがいい。機動隊こそ暴力なんだ。佐藤内閣こそ暴力政府なんだよ。

それから大学をまず守るということだけを我々は今問題にしてるんだ。しかも守るべきものは大学ばかりじゃないんだよ。しかし最後にあるいは最初に守られるべきものは大学なんだ。この大学が潰れれば日本のあらゆる民主的な組織は潰れるんだよ。大学が占拠によって守られれば日本のあらゆる民主的な組織は守られるんだ。大学が終りになるのかそれとも初めになるのか、それを今諸君が実証しようとしているんだ。この大学の改革の問題という実に長い数十年に渡っての問題だ。そして他のあらゆる方法でやってみての駄目な問題だ。それは最後に占拠によって改革される他方法はないという、この点はどっからたたいてみても間違っちゃいない。

したがってこの方法を放棄する者は大学改革を放棄する者なんだ。これに反対する者は口で何と云おうとも大学をほんの一寸でも改革しようとする実際の意志のない人間なんだ。諸君がこの大学改革の重大な使命をあくまでも貫徹されることを深く期待します。

学問の知性の荒廃を告発する

しかも問題は最後には学問の問題になってくるんだ。今大学で教えているようなことは、あれは学問かね。東大を、――まあ京都大学のことは暫く遠慮するが――、東大であれが政治学のホープだと云われてたような教授たちが何をしたんだ。林健太郎君なくて昔はあれは僕の弟子だったんだ（笑）。まあ僕の教育が行き届かなかったことははなはだ恥かしい（笑）。この林君が学生と交渉している最中に林君を帰してくれといってシュプレヒコールをやった丸山真男君の政治学なんていうものは果して学問だろうか。あるいは国際問題について雑誌なんかに論文を書いている坂本義和君なんていう若い教授が加藤学長代行にくっついていわゆる何学部かの覚え書きなんてものをこしらえたんだな。こんなものが何が学問であるか。あるいはこないだまで僕はいくぶん学者ではないかと思っていた寺沢君なんていうのはだ、あの確認書っていうものは条約でいえばまだ批准の前だ、だから批准して批准書を交換して初めて効果が発生するなんていう。こんな馬鹿気た学問があろうか。批准したか批准を交換しないか知らないが学校当局と学生とが約束したものがどうして無効なんだ。それならあらゆる約束は無効だよ。どんなに大きなハンコを押したって無効だ。いわゆる神士協約ってのはなにも文書がなくっても有効なんだ　いわんや確認書は文書があるじゃない

か。それでさえ無効だというようなことを云っている人間が東大の教授の中の進歩的な良心的なね、京都大学は政治学部が貧弱だから東大から丸山君を呼んでこようなどと言っているその丸山君が、シュプレヒコールをやるより何の理論もないんだ。

この学問の問題は実に重大だよ。これは今京都大学の教授諸君でも自分のやっていることが果して学問だろうかと、これは現に果してこないだの戦争を防ぐことが出来たかと、また現在日本がどんどん保守半永久政権で、ファシズムになり戦争が近ずいてくるのを少しでも防げるような学問があるのか。全々無効じゃないか。何の役にも立たないじゃないか。日本の国民がどんどん不幸になってゆくのをくいとめる力のないような学問は絶対学問じゃないよ。

国民の税金でできてる大学の建物をこわすな、なんて馬鹿気たことをいうのは全く大学が何のためにあるのか知らないんだ。大学は建物ではないよ。建物なんぞは何度こわれたって国民は税金で建て直してくれますよ。国民が希望してるのはどうか大学の学問で国民を救ってくれと言ってるんだ。建物をこわしてくれるなといって税金を出してるんじゃないんだよ。国民が税金を出してるのは日本にも学問らしい学問をこしらえてくれと、それで佐藤栄作のようなやつは一刻も早く打ち倒してくれと、そして安保条約みたいなものは一刻も早く廃止してくれと、全日本から基地なんてものをとっぱらってくれと、そして全ての日本の国民の税金が国民の生活を少しでも楽になるように使ってくれと頼んでるんだ。

しかし国民には学問もないし、国民には組織もないんだ。実際手も足も出ないんだよ。国民が手も足も出ないばかりじゃない、この頃は労働組合も手も足も出ないんだよ。労働組合も手も足も出ないというばかりじゃない、社会党だって共産党だって手も足も出ないんだ。僕だって手も足も出ないんだよ。だから自分が手も足も出ない連中は、学生の闘いによって、自分達だって手を出し足を出すチャンスを得られることだという確信を持つべきなんだ。

きのう東京からくる朝の新聞、毎日新聞の朝刊だったかな、東京にいるイギリスの新聞の「オブザーバー」という新聞の特派員がロンドンに報告を送っている。日本の状況は今年中にフランスの五月革命のようになる、という風に観測される。この「オブザーバー」の記者って人はね、別に素人じゃないんだよ。いいかげんな報告を送れば「オブザーバー」が売れなくなるだけの話なんだ。今年中に日本はパリのようになるなんて言ったけどならなかったじゃないか、というやつは誰も「オブザーバー」を買わなくなるんだよ。だから「オブザーバー」の報告は客観的な報告だと、よそからみてもそう見えるんだよ。京都大学は「無用な抵抗」はやめた方がいい。加藤学長代行は安田講堂を占拠した学生に向って「無用な抵抗はやめろ」と言ったが、加藤代行こそ「無用な抵抗」をやめたらいい。これは客観的な事実です。しかも日本の中の事実だけじゃない、全世界にわたる事実なんです。しかも資本主義社会における事実ばかりじゃない。社会主義社会にも共通せる事実なんだよ。要するにどんな正しい理論でもだ、国民をすくうことができないようなのは理論じゃないんだよ。君たちが大学で学んでいる唯一つの希望は自分の学問が国民の幸福に役に立つのか、それともただ自分の一身の出世のために役に立つのかという問題なんだよ。

学生の中にはまだね、自分は大学を卒業して就職して嫁さんでもらってと思ってる人も居るんだろう。しかしその将来がどんな味気のないものだかと。日本の社会は今日ゴマスリ社会となってるんだ。大学を卒業してゴマスリになってどうするんだ。ゴマスリは人間じゃないよ。だから俺はもう人間でなくていいんだと、ゴマスリになるんだと思う人はまだ沢山いるんだ。この人たちに訴えたいねえ。

やっぱり大学で学ぶためには、その大学の学問によって自分一人だけじゃなくて、周りの人間を一寸でも幸せにするような学問を作りださなければならないんだ。今の京都大学や日本の大学にはそういう学問はないんだ。なかったんだ。こないだの戦争に抵抗できなかったんだ。あんな戦争に抵抗できないような学問は断じて破壊しなきゃだめだよ。佐藤内閣に抵抗できないような政治学は破壊しなきゃ駄目です。破壊の途中で建設は絶対できないんだよ。いいかげんな土台の上に何を建てたってすぐくずれちゃうんだ。その土台は占拠だ。占拠の上に一寸でも大学の改革が出来るか出来ないかという問題だ。諸君の健闘を期待します（拍手）。

国家。大学を解体せよ

一

けさの新聞はでたらめばかり書いてるね。（笑い）ぼくが、羽仁五郎がアジ演説をやったっていう……意味がよくわかってないんだろうと思うんだな。その、京都大学というところは、ぼくの親友だった三木清という哲学者を追い出した大学なんだよ。それで、三木清はやがて獄中で死んだんだ。三木清を京都大学から追い出した京都大学の哲学は、戦争に協力したんだ。そして、敗戦と同時に追放されたんだ。そういう京都大学は一体、何を反省しているのか、いまと同じじゃないか、どこが違ったんだ。ぼくはそういう京都の学が、学者らしい、まあ三木清といえば、日本の哲学者らしい哲学者だよ。その三木清の哲学上の立場がどうだかという問題は別の問題で、とにかく哲学者だ。そういうほんとの学者を放り出して、それであとの連中だな、その戦争に協力したたとえば高坂君とか、（笑い）あの、よくこのごろテレビに出て来る若い人じゃないんだよ。あれのおやじらしいがね。（笑い）それはみな、いわゆるこの大東亜共栄圏だとか、その、戦争の精神的な力だとか、自分でも恥ずかしいと思うんだよ、いまね。どうして自分はあんなことを言ったんだか、わからないんだろうと思うんだよ。

しかし、ぼくはやっぱり、学者というものは社会に責任があるんだよ。だから、自分が理論上間違いをおかしたらもう二度と、社会、国民の前に顔を出すということは遠慮したほうがいいと思うんだよ。（拍手）それは、魚屋さんだって腐った魚を売って、それを食べた人が死んだりすれば、もうその町内で魚屋はできないんだよ。そうだろう、それをそういう戦争に賛成するような、まあ京都大学の哲学科の連中は、戦争全体に賛成したわけじゃない。陸軍には反対したが、海軍には賛成したなんていう（笑い）そういうばかげたようなことが平気で言えるような者がなんで学問かね。その、反省してもう自分は勉強し直すという、一学生になって勉強し直すというふうな気持ちなら、ぼくは何も一ぺん人間はあやまちを犯したら、もう二度と立てないとは言わない。勉強はやり直せばいいんだ。ところが、やり直しもしないで、この高坂君というのは、東京の学芸大学の学長になったんだ。だから学芸大学の学生は不安にたえないよ

ね。（笑い）

そういうことを、けさの、朝日なり、あるいはサンケイなりの、羽仁五郎が京都大学でアジ演説をやったというようなことを書いた人間は、どれだけわかっているのか、全然わかってないんだよ。この関西学院大学にしたって同様だよ。この関西学院大学には、もうだいぶ年をとったから引退されてるようだけれども、ノルマン君という宣教師がいるよ。このノルマン君の弟のエジャトン・ハーバート・ノルマンというのは、ぼくの弟子の一人だったんだ。ぼくの弟子にもずいぶんいろんな、林健太郎なんていうのも昔はぼくの（笑い）弟子だったんだよ。だけど、昔はぼくのところで勉強して、見込みがあるかと思ったけれども、（笑い）要するに林健太郎君なんかは、現代の現状の認識がゼロなんだね。学生を処分するなんていう、現代の大学に学生を処分する資格があるかどうかということなんだ。（拍手）現代の政府が学生を処分する資格があるのかと、現在の検察庁だって、学生を処分、起訴する資格があるだろうか。

この間、検事総長が汚職問題に関係している、与党の幹事長と一緒にめしを食ったというじゃないか。（笑い）一体、その検察の責任というものをほんとうに感じているのか。現に、検察庁はいまの首相である佐藤栄作って男が、造船汚職でたいへんなワイロを取って自民党につぎ込んだ。それを逮捕しようとした直前に吉田茂が、いわゆる指揮権を発動して、それをつかまえることができなかったじゃないか。そうだろう。大ものをつかまえることができないで、小ものばかりつかまえてどうするんだ。（笑い）

だから検察官は、ぼくは参議院で法務委員を七・八年もやって、裁判官や検察官や警察のことをずいぶん、まあ少しでも国民の迷惑にならんようなものに　　このごろ学生が国民に迷惑をかけている、とんでもないよ。政府が国民に迷惑をかけているんだ。ぼくはそういう警察や検察官や裁判が国民に迷惑をかけないように、ずいぶん法務委員として一生懸命やったんだが、そのとき、つくづく感じたが、検察官なんて全然勉強してないよ。酒ばかり飲んでんだ。（笑い）それは無理もないんだよ。その、佐藤栄作でもつかまえれば、うちへ帰っても奥さんが、「あなた偉いわね、見直したわ」なんていうことになるんだけど、小ものばっかりつかまえてるんじゃ、細君だってばかにするだろうからね。（笑い）だから、まっすぐうちへは帰れない。（拍手）

それで、あの検察官や裁判官や弁護士になる人が、大学の法学部を卒業してから、司法研修所というところで二年さらに研修をやるね。その司法研修所というもの、ぼくは法務委員でやったころには、なるべくそこへ行って裁判官や検察官や弁護士になる人は、本格的な勉強をやるように指導したんだが、最近は、ぼくはいかなくなっちゃったから、どういうふうになっているかわからないんだが、それでもだよ、その研修所が去年、その研修生に向かってアンケートを出して、この自衛隊というものは、合憲であるか違憲であるかといったら、これから弁護士になる、裁判官になる　　はまだいいよ。これから検察官になろうと思っている司法研修所の研修生のどの程度の人が、自衛隊は憲法に合憲だというふうに答えたと思うか、君たち。わずかに七％しか合憲だと答えないんだよ。だから、司法研修所といえば、これから弁護士や検察官や裁判官になる学生なん

だ。これだって学生のときは、自衛隊が憲法違反だってなことは明白に認識できるんだよ。ところが、彼らが卒業して検察官になるとどうなるかというんだな、七％が逆になっちゃうんだよ。（笑い）九三％までが合憲になっちゃんだな。そうでなければ、学生を検挙できないんだよ。

だからぼくは、学生が現在、大学を封鎖する、あるいは、そういう問題については、ぼくの、羽仁五郎のアジぐらいで、京都大学の学生が京都大学を封鎖できるものじゃないよ。羽仁五郎だけじゃない、アジ演説なんかで封鎖ができるもんじゃないよ。それなら、ぼくがアジれば必ず封鎖できるかってんだ。そんなことはないよ。そりゃまあ人によっちゃ、羽仁五郎は、日本第一のアジテーターだなんていう人があるけれども、幾ら日本第一のアジテーターだって問題がないのに、アジったって、絶対、なんにも起こらんよ。ぼくは、日本の最低のアジテーターであったって、問題があれば学生は立ち上がるんだよ。そんなことがわからないで、何が朝日新聞だ。（笑い、拍手）

第一、朝日新聞という新聞はね、（笑い）戦争中、何をやったんだ。朝日新聞の社屋は、青年の血でいまだに洗われていないんだよ。この間の戦争で、何十万の青年を殺し、何百万の日本の国民を殺す戦争に、毎日毎日太鼓をたたいた朝日新聞は、あの当時とどこが違ってるんだ、いま。第一、名前が違っていないよ。（笑い）

しかも、いま現状で、ついこの間、明治百年という、明治百年といえば、日本でやらなきゃならないことは、ただ一つしかないんだよ。何だと思う。中国や朝鮮と国交を回復することだよ。日本は、中国や朝鮮人民に、筆舌に尽くせない苦しみを与えたんだ。朝鮮に対しては、一九二三年の関東地方の大震火災のときに、東京中心に多くの朝鮮人を虐殺したんだ。それはおそらく、ぼくは、ヒットラーやムッソリーニに非常な暗示を与えたもんだと思うんだ。日本は、断じて後進国じゃないよ、そのファシズムの方面ではね。先進国ですよ。ヒットラーの先生ですよ、日本は。（笑い）それは、最近は生物学を研究しているという天皇の、個人じゃないが天皇制というものは、やっぱり、ヒットラーやナチスやファシズムにいろんな教訓を与えてるんだよ。日本の元の日本帝国憲法というものが、ドイツ、カイゼルの帝国憲法から教えられたという、そのお返しをやったんだな、今度は。

朝鮮の人たちを虐殺したっていうのは、その一九二三年に東京地方に、非常に大きな地震が起こったんだ。地震が起これば、政府はその地震で苦しんでいる人を助けるということを考えるのがまっとうな政府ですよ。ところが政府は、地震で苦しんでる人の世話なんかひとつもやりゃしない。こんな苦しんでいる国民は革命を起こすだろうと考えたんだな。それには先手を打たなきゃならぬと。その先手は、まっ先に不満で立ち上るのはおそらく朝鮮人だろうと、だから逆宣伝を流して、朝鮮人が暴動を起こそうとしている、朝鮮人がほうぼうの池に毒薬を投げ込んでいる、というふうに言うから、無知な日本国民は、政府のいうことだから、少しはほんとうのことがあるだろうと思うんだよ、ばかなやつだよ全く。（笑い）政府のいうことに少しはほんとがあるだろうなんて思う人は、もう大学生じゃないほうがいいよ。（笑い、拍手）

少しはほんとがあるなんて、比較的な問題じゃないんだよ。政府は、少しは国民のためを思って、幾らなんだって、佐藤首相も首相である限りは、少しは国民のためを思い、ほんの少しは学生のためを思い、ほんの少しは大学のためを思ってる、なんて思ってるやつは、大学生はただちにやめた方がいいよ。何も、人間は大学生にならなきゃならぬなんてことはないんだよ。だけど大学生、そういう大学生は有害だよ。そういう人は、魚屋さんなり、げた屋さんなり、職業に貴賤はないんだ。比較的害のない、（笑い）そういう魚屋さんだって害があるよ、腐った魚を売ればね。しかし、魚が腐ってるか腐ってないか、お客にもわかるんだよ。しかし、学問が腐ってるか腐っていないかは、国民にわからないんだよ。（拍手）だから、大学生の負うている責任は非常に重大なんだ。君たちがこの大学で学んでいる学問が、万一腐ってれば、腐った魚を買った人が一人や二人死ぬんじゃないんだよ。数百万、数千万の青年が死ぬんだよ。だから、大学の負うてる使命は非常に重大なんだ。大学生の負うてる使命は非常に重大だよ。これはね、何もぼくばかりが言うんじゃないんだ。

二

たとえば、学生運動が今日のようになる前に、どういう……、最近の歴史だけを見ても、たとえば、一九五二年か、いわゆる昭和二十七年に、東大にポポロ事件というものが起こったよ。このポポロ事件の記録は、みんなが忘れないほうがいいんだ。ポポロ事件というのは要するに、東大の中の自治活動の、劇団ポポロ、というのが……、まあどうしてポポロという名を付けたか、ぼくが戦争前に書いた岩波新書の「ミケランジェロ」という中に、あの当時は「人民」ということばは使えなくなってたんだよ。しようがないから、イタリー語でポポロ、ポポロ、て書いてたんだ。その影響があるんだろうと思うんだがな……。（笑い）その、劇団ポポロが、当時松川事件の芝居をやったんだよ。松川事件はいまじゃ無罪なんだよ。しかし当時は、死刑にあたる有罪の事件だ、というふうに世間のばかどもは思っていたんだね。そのばかどもの思っている松川事件は死刑にあたるような犯罪じゃないと、まあ犯罪は犯罪だけれども、それにあげられている人たちは、それをやった人たちじゃないと。だれがやったのかはいまだにわからないんだよ。いまだにわからないといえば、日本の政府とアメリカの占領軍がやったにきまってんだよ。（笑い、拍手）そういう芝居をやったところが、そこに警察が入ったんだ、私服でね。大学の中に警察が入ってはならないんですよ。大学の中だけじゃない。おれのうちだって警察が来ちゃならないんだよ。来るなら「こんにちわ」って言わなくちゃいけないんだよ。これは、いいかげんなことを言ってるんじゃないんだよ。ぼくは法務委員だから法律のことはよく知っているんだ。警察官職務執行法という法律があるんだよ。これも漢字で書いてあるもんだからみんなにわかりにくいんだよ。あれは、かなで書けばいいんだ。そうすれば、おまわりさんの商売のやり方って法律なんだからね。（笑い）だから、だれだって関心を持つんだよ。それを、警察官職

務執行法、なんて、ぼくは専門家だから一口に言えるけれども、しろうとが一口に言おうと思や、〝べろ〟かんじゃうよ。（笑い）しかし、警察官職務執行法の中で、一番直接わかりやすく君たちにわかるのは、警官のやる質問を職務質問というだろ。なぜただ質問といわないんだ。それは商売上やる質問なんだよ。商売上の質問っていうのは、だれだってやるんだよ。八百屋だってやるんだよね。八百屋が、「学生さん、学生さん、このごろミカンがだいぶ安いんだけど買わないか」、というのは職務質問なんだよ。だから答えたけりゃ答えてもいいがね、しかし答えたくなけりゃ答えなくてもいいんだよ。ぼくだけがそういうことを言ってるんじゃないんだよ。たとえば、ぼくは、参議院で法務委員のほかに、国会図書館を設立する委員長をやって、それでいまの国立国会図書館というものを建てたんだよ。あんなりっぱな図書館を、ぼくだから建てたんだよ。（笑い）あの国立国会図書館の計画をやったときに、朝日、毎日、読売なんて新聞は何と書いたかと、恥ずかしくないかって……。羽仁五郎なんて自分の趣味で、えらいでっかい図書館建てるってんだ。国会議員が本を読むと思ってるのかってんだ。（笑い、拍手）国会議員が本を読んでくれれば、おれは図書館なんて建てないよ。国会議員が本を読まないから図書館が必要なんだよ。

しかも本を、国会議員てのは、顔を見ても胸くそが悪くなるやつが多いんだよ。（笑い）ぼくは、参議院に九年もいたもんだから胃かいようになっちゃったんだよ。（笑い）それはね、君たちの顔を見てれば胃かいようにゃならないんだよ。若返るんだよね。しかし、あの佐藤栄作なんてやつのつらを毎日見てると、胃かいようにならないほうがうそですよ。（拍手）けれども、実に下劣な連中だが、何といったって国民があれを選挙してくるんだからしょうがないんだよ。もう、ああいうの選挙するのやめてくれりゃ助かるがね。

しかし、日本の国民の中には、これは、われわれ君たちの責任なんだよ。学問がほんとうになってないからね。むづかしいことばっかり言うから、国民は読めやしない。わからないんだよ。いまの学生諸君だって、ずいぶんむづかしいことばっかり言うね。だから、国民が聞いても何の事かわからないだろう。何のことかわからないから、国民は自民党を選挙しちゃうんだよ。だけども、そういって国民を、いまさらつかまえてしかってみたってしょうがないよ。とにかく、国民が選挙してくる議員なんだ。だから、ぼくは、公然と国民が選挙してくるものは、ばかでもちょんでも議員なんだ。ばかでもちょんでも、これが議員である以上、この人に少しでも国民のためになる政治をしてもらわなきゃならない。そのためには、ばかでもちょんでも、これにいい材料を与えればいい仕事をするんだ。その、ばかでもちょんでもの議員にいい材料を与えるのが国会図書館なんだよ。

だから、君たちは聞いておるだろうが、吉田茂という人が首相をやっておるときに「ばかやろう解散」というのをやったんだ。この「ばかやろう解散」というのは、どういうことだったかというとね、いま、民社党の書記長だか委員長になっている西村君というのがいるね。まあ、西村君は別に、ばかだとかちょんだとかいうんじゃないんだよ。しかし、まあたいへん偉い政治家というわけでもないだろうな。（笑い）あの西村君が、吉田首相に向かって、「日本国民

は、日本に駐留している米軍のために非常な負担を負うている。ヨーロッパでも、イギリスなり、フランスなり、ドイツなり、ほうぼうの国は米軍が駐留しているが、それらの国の国民は、日本のような負担をしょっているのか、一体、どの程度の負担をしょっているのか、ヨーロッパの例を材料を出せ」、と言ったら、政府にその材料がなかったんだよね。何しろ日本の政府というものは一方しか見ていないんだからね。アメリカのほうしか見ていないんだからね。全然、ほかのほうは見ちゃいないんだよ。馬車馬のようにこうなっているだろう。（笑い）だから、ヨーロッパの駐留軍の国民の負担の材料さえなかったんだ　だもんだから、吉田君が、この外務省の官吏に早く材料を出せと言っても、なかなか材料が出ない。そこで、西村君は、「政府が持っていないんなら、おれが見せてやろう」、と言ってどんと吉田茂の前に材料を投げつけたのは、国会図書館から出た材料なんだよ。西村君が、自分で調べたんじゃないんだよ。それで議会が解散になるぐらい国会図書館というものは役に立つものなんだ、おれがいるときは、それぐらい役に立ったんだ。しかし、そういう国会議員は、自民党が、極力落選させようと努力してね、それが成功してぼくは落選しちゃったんだ。（笑い）

そういう国会図書館というものの初代の館長に金森君という、金森徳次郎君という人がなった。日本の現在の憲法をつくったりするのに仕事をしたという。ほんとうはぼくは、国会図書館の館長に中井正一という、京都大学を卒業、三木清の弟のような。それで、尾道の図書館長をやっていた。図書館がおもじゃない、哲学者なんだ。で、若い。戦争中はやっぱりつかまって牢屋に入っていたんだ。この中井君をぼくは、参議院で図書館長に推薦したんだよ。そしたら、議会から政府からびっくりぎょうてんしてね、羽仁五郎は国会図書館を赤化する、というんだ。赤化するんじゃないんだよ。戦争に反対できるような図書館長が必要なんだよ。何のための図書館があるんだ、戦争に反対もできないで。ところが、まあ、中井君が館長になるということは、あんまり反対が多いので、金森徳次郎が館長になり、中井君が副館長になって。この中井君をあらゆる官僚がいじめたもんだから、中井君もついに死んじゃったんだ。この間。

その金森徳次郎でさえだ、さっきの問題だが、この、議会もおそくなると、国会図書館の人はかなりおそくなる。その国会図書館職員に向かって、おそく帰ると警官が職務質問なんかをする場合がある。しかし、職務質問というものは、職務質問だから答えなくてもいいんだと。で、答えたけりゃ答えてもいいが、答えたくないときには答えないでもいい。そのとき、警官が、「あなたは、なぜ答えないか」というときに、君らがいろいろ理屈をこねているとね、へたな理屈をこねるとつまらん間違いが起こるといけないから、憲法の金森徳次郎が、答えないでいいと言ったといって通っていけ」、という訓示をやったそうだよね。さすがにぼくが任命しただけのことはあって、相当の館長だったんだ。

これは、職務質問についてだけは非常にはっきり警察官職務執行法に書いてありますけれども、警察全体をどういうふうに使うかということについては、厳重な原則があるんだよ。現在、大学へ入ってきている警察機動隊ってものは、断じて警察じゃありませんよ。

あれを警察だと思っている人は、勉強をやり直したほうがいい。警察というものはね、国民に向かって公平に動くものでなければならないんだ。政府と国民とが対立している場合には、警察は、いずれかの味方をすることは絶対に許されないんだよ。警察というものは、私兵じゃないんだよ。私の兵隊ではないんだよ。大学当局と学生とが、意見が対立している場合に、警察は断じてそこへ入ってくることはできないのだよ。（拍手）大学、警察は、政治的な問題に絶対にタッチしてはならないんですよ。（拍手）警察は、まあ、ぼくは、理論的には警察というものはなくても社会生活はりっぱにやれるもんだと思っているよ、理論的には。そういうと、勉強の足りない人は非常にびっくりするかもしれないんだがね。まあ、理論的には、警察とか軍隊とかいうものは、気休めに置いてあるんだ、あれはね。全然ないというと、しろうとが不安がるからね。置いてはあるけれども、何の役に立つもんじゃないんですよ。

現に、官僚組織というものはそういうものなんだ。パーキンソンの法則というのがあるだろう。官僚というものはね、事務の増減、事務がふえるか減るかによってとは関係なく、官僚組織というものは増大するというんだ。おれが言うんじゃないんだよ。パーキンソンという人が言うんだよ。警察もおんなじです。事件があるかないかに関係なく警察は増大するんだよ。パーキンソンは言ってら、「仕事が全然ない組合にも官僚組織は増大する」って言うんだよ。（笑）

いま、学生が騒ぐから機動隊が来るなんというばかなことを考えてるやつがいるんだよ。パーキンソンの法則でもよく読んだらいいだろう。仕事があるから警察が来るんじゃないんだよ。あったってなくったって来るんだよ。騒ぐからひどい目にあうというのはね、日本国民の長い間の教育の結果なんだよ。日本国民ぐらい騒がない国民はありゃしなかったんだよ。見たまえ、この間の第二次大戦で、レジスタンスの起こらなかったのは日本だけじゃないか。そうだろう。全然なかったとは言わないよ。現に、ぼくなんかも牢屋に入ってたんだからね。しかし、そういう少数の人間だけがあって、世界の至るところであいう大衆的にあったレジスタンス運動というのは、日本にはなかったじゃないか。日本には抵抗の伝統はないんだよ。抵抗の伝統がないと、どういうことになるかというと、この間の戦争のようなことになるんだよ。あの戦争でね、「天皇陛下万歳」とか、あるいは「おかあさん」とか言って死んだ青年たちのことを考えてみろ。彼らは、自分自身で何の抵抗をする力もなかったんだよ。まあ、おかあさんというものは、実に有害なもんだよ。おかあさんというものがある間は、男は独立しないんだよ。戦争が、いいか悪いか自分で判断できないんだよ。そんなところで「おかあさん」なんて言って戦死するやつがあるものか。（笑い）

ぼくは、この間、わだつみ会という、「聞け、わだつみの声」、というのがある。まあ、いい会だというふうに普通思われているんだよな。この間の戦争で、多くの青年がわだつみの底に沈んで死んでいる。そういう人たちを慰めるのに――ぼくは慰めるなんて大きらいですよ――あるいは、そういうことを繰り返さないというんでわだつみの会をやって、あんまり好きじゃないんだ。大きらいというちゃ少し語幣があるが。ところが、この間、十何周年とかいうんで、よっぽど断わろうと思ったんだが、いま、わだつみ会をおもに

やっている人が、泉アキというんだ。女の評論家でね。この人がなかなかいい評論を書いている『日本浪漫派批判』という。ぼくは、この「日本浪漫派」というのは、実に有害だと、文学者が戦争に協力するなんてばかげたことがあるかと。高村光太郎なんて断じて詩人じゃないよ。詩人といえば空想力が豊富でなけりゃならないな。それが戦争に協力ができるなんて、実に空想力の貧弱な男なんだ。そんなものがどうして詩人だか。そういう浪漫派の、ぼく一人で、この亀井勝一郎とか、まあこれは死んじゃったから、かわいそうだからあんまり言わないが（笑い）、彼らの保田与重郎なんて最近また復活してきているよね。こういう浪漫派というものがいかに有害であるかということを、ぼくひとりでやって、さすがにひとりでやっているとくたびれるんだ。そしたら、この泉アキという人がやり出してくれたんでね。ほんとうにぼくは、これはもうれしかった。この泉アキさんという人が、わだつみ会の事務局長をやってぼくに来てくれというんで、しょうがないから行ったんだよ。

ぼくは、そういう講演会みたいなものを前の人の話も全部聞く、まあ世間からいうと悪い癖ね。ぼくからいえばいい癖があるんだ。どうして世間で悪い癖かというとね、ぼくはほかの人の講演を聞いて、あとで全部それをひっくり返すというんだな。（笑い）中野好夫なんというやつは、だから羽仁五郎と一緒に講演なんかに行かないというんだよね。それで、この間も三木清の全集が出るときに、岩波書店が東京の朝日講堂で講演会をやって、ぼくの前に古在由重君というのが話するはずだったんだが、二、三日前に新聞記者がたずねたら、古在君がえらい青い顔をしてしょんぼりしている、「どうしたんだ、腹でも痛いのか」と言ったら、「いや、そうじゃない。あしたかあさって講演に行くんだけど、おれのあとに羽仁さんが講演をやるんで（笑い）さぞおれをこてんこてんにやっけるだろうと思ってもう元気が出ないんだ」って、古在君はそんなに自信がないんだよ。（笑い）

まあ、それは別の話だが（笑い）。で、わだつみの会に行ってまあ話を聞いていたんだな。そうしたらぼくの前に石田雄というね、若い学者が立ったよ。石田雄君というのは、おれはよく知らないけど、東京大学の政治学か何かの若手のホープらしいね。岩波書店なんかでも本を出したり、『世界』なんかにもなかなか、まあちょっと見るとよさそうなことを書いているんじゃないかな。（笑い）ぼくは、彼の本を読んでみようと思ったけども、とても三ページと読めない。わけのわからんことが書いてあって。で、残念に思ったんで、きょうは話が聞けると思ってね、たいへん楽しみに聞いてたんだよ。そしたら、石田君がどういうことを言うかって、「自分は戦争中、海軍に志願した」というんだ。おれは、ひっくり返るほどびっくりしたよ。（笑い）で、どうしてだっていったら、「陸軍は目の前で人を殺さなきゃならないが、海軍は遠方で人を殺すんだ」って。（笑い）これが、現在の東京大学の政治学の若手ホープの教授なんだよ。丸山眞男君にしたってめなそうだよ。似たもんだ。

ぼくは、八月十五日ね、敗戦の八月十五日に牢屋に入っていて、あの日にぼくの教えた弟子たちや若い学者が、　ほんとうは、ぼくと一緒に牢屋に入っているはずなんだけど、あまり入って来なかったが（笑い）　しかし、あの八月十五日に日本が降伏したときには、かけつけてきて、ぼくの牢屋のとびらをはずしてくれるもんだと思って一日待ってたんだ。

あの日が日本にとってはね、絶好のチャンスだったんだよ。相手は全く無力になっていたんだ、日本の政府は。天皇だっておろおろしてたんだよ。日本の政府だって、だれも政府のやり手がないようになったんだよ。あのとき、革命はきわめて簡単にできたんだよ。ぼくでもね、三十人ぐらい友だちを連れて宮城の前にいって、日本共和国を宣言すりゃ、それで革命はできたんだよ。だれもつかまえにくる元気はありゃしないや。（笑い）あの戦争でね、あんなとんでもない事をやったと、あの八月十五日には、日本の支配階級は全く自信を失って、全く能力を失っていたんだよ。だから、あの八月十五日に革命をやれば、きわめて簡単にできたんだよ。この間、カストロがキューバでやった、あれよりももっと簡単にできたんだよ。そういうときにやらなきゃだめなんだよ。だから、おれは一日待っていたんだけども、だれも来ないんだな。夕方になっておれはずいぶん失望したよ。ああ、きょうやればできるのにね、（笑い）出られないんだ。まあ、あしたでもまだいいと思って、翌日も一日待っていたよ。だれも助けに来なかったよ。

だから、この間、『思想の科学』というので鶴見俊輔君が、「戦後史を語れ」、というので、ぼくは、「八月十五日が、戦後史のすべてなんだ」と、「八月十五日に戦後の日本のすべてが決定されたんだ。」と言ったら、鶴見君が、「それはよくわかる、あのとき、助けに行かなかったことは、自分は非常に悪かったと思っている。」（笑い）鶴見君はこのごろ、同志社で教えているんだろうな。まあ、この関西学院と兄弟的な大学だろう。わりにいい先生なんだ、あれもね。だけれども、その、「八月十五日に助けに行かなかったことは非常に悪かったと思ってる。だからその後、ずっと出ずっぱりでやってます。」と言うんだよ。出ずっぱりなんかが何の役に立つかっていうんだ。（笑い）毎日出ていくなんていうのは官僚のやることだよ。ぼくなんかは毎日絶対に出てこないよ。毎日はうちで寝てますよ。そのかわり、理論的に実行できる、理論というものはそういうものなんだよ。簡単なものなんだよ。だから、八月十五日にやらなかったということは、まあ、われわれは、中にいたんだからしようがないよね。外にいた学者の責任だよ、これは。そういう背景が、現在の学生運動のうしろにあるんだ。それを知らないでね、関西学院大学の場合にも、このノルマン教授の弟さんのメルマンは、ぼくのところで日本の歴史を勉強して、それで岩波新書で、『忘れられた思想家・安藤昌益』という本を書いている。

カナダの外交官で、最後にはカナダのエジプト大使になってカイロにいたんだよ。一九五六年に。そのとき、スエズで戦争が起こりそうになったんだ。ノルマンは羽仁五郎の弟子だからね、力を尽くしてスエズ戦争を阻止したんだよ。そのときに、アメリカの上院の、いわゆる非米活動委員会で、ノルマンはコンミュニストだと、カナダの大使がコンミュニストであっていいのか、という批難したんだな。だから、ノルマンの大学時代の友人であるピアトンが、カナダの外務大臣が非常に困ったんだ。で、ノルマン君は、非常にくたびれていたせいもあるだろうが、カイロでホテルの上から身を投げて自殺しちゃったんだ。こういうノルマン君のような良心的な学者ね、ノルマン君のような良心的な外交官を自殺させてしまうような世界の現状なんだよ。そういう状態を、一体どこから変えていったらい

いのかということなんだよ。

ぼくはこの間、『都市の論理』という本を書いたんだ。実によく売れるね。（笑い）初め出した本があんまりよく売れるんで、本屋が笑いがとまらないって言ったから、ぼくは本屋を呼びつけて、「笑いがとまらないなんてほんとうに言ったのか。」って言ったら、ほんとうにそうだって言うから、「このやろう」っておこったんだよ。おれは、あの本を書くために体重が四キロも現って、歯が五、六本も折れているのに、きさまが笑いがとまらないとは何事だ、」と、「本は絶版にする」って言ったんだよ。そしたら非常にびっくりしてね、「絶版だけはかんべんしてくれ、どんなに売れているんだから、」って言うから、「絶版をかんべんするから条件を出せ、」って言ったんだ。そしたら、「何でもする、」「何でもするなんてだめだよ、何をするか言ってみろ、」って言ったら、「何をしたらいいか、」って聞くから、「おれに聞くばかがあるか、」（笑い）と言ったら、「いや、そういう意味じゃなくて、どうしてもいい考えが浮かばないから、先生の考えを聞かせてくれ、」というから、「それなら、定価を半分にしろ」って言ったんだ。学生やら労働者が、ずいぶんあの本を読みたいんだが、九五〇円じゃ高いと、買えないと、おれんとこはがきがたくさんきているから半分にしろと。「半分はつらい」と言うんだよね。何がつらいかって。いままで、笑いがとまらないなんて。（笑い）かつね、あんなにみんなが読みたがってるんだから、必ず猛烈に売れるに相違ないんだと、断じて四五〇円にしろと言って四五〇円にしたんだ。せっかく、半値にしたんだからね、買わなくてもいいから読んでみろ。

どうして「都市の論理」ということをぼくがいうのかというと、ぼくは、「国家の論理」というものは、今日、存在しないと思うんだよ。（拍手）それは、マルクス・エンゲルスもね、国家はやがて消滅すると言ったんだ。現在、国家は消滅しつつあるんだよ。国家がやってることで、少しはいいことがあるかね。まあ、国家が、いかに今日消滅しなきゃならないか、ということは、日本の現在の国家がそれを証明しているよ。この日本の国家を見てりゃ、こんな国家は、消滅するよりほかはないと考えないような人間は、考える能力がないんだよ。（拍手）現在の日本の国家というのは、まあ、詳しくは、この『都市の論理』をね、読んでもらいたいんだ。（笑い）

で、しろうとは、わからない人は、たとえば、公団・公社というものがいいもんだと思っているやつが多いんだ、まだ。やつが多いばかりじゃない。社会党の網領の中にも、まだ公団・公社で何かするようなことを書いておるよ。不勉強なやつらだ。共産党もね、公団公社なんていうものについてはっきりした見解がないんだよ。しかし、実際、公団公社というのは何をやっておるんだと。道路公団というのは道路をつくってるのか。住宅公団というのは住宅をつくってるのか。そう思ってるやつは、大学生はやめた方がいいよ。安全保障条約というのは、安全を保障する条約なのか。そう思ってるやつは、大学生はやめたまえ。頭が働かないんだから、ほかのことをやったほうがいい。さっきから言ってるように、ばかにして言うんじゃないんだよ。頭の働かなくても害のない商売もあるんだよ、世の中には。（笑い）しかし、学問をやるのに、頭の悪い人が学問をやるというのは有害なんだ。さっきからいうとおり。いわゆる不

当表示というんだな、不正表示。あの、レモンが入ってるって、全然入ってないんだよ。レモンが入ってないぐらいのことはどうでもいいよ。安全保障条約ってものの中には、戦争が入ってんだよ。道路公団は、道路なんかをつくるんじゃないんだよ。住宅公団は、住宅をつくるんじゃないんだよ。まあ、全然つくらないとおかしいから少しはつくるんだがね。（笑い）目的は、ほかにあるんだよ。この名前と実体とは、今日、全く逆のものになっちゃってるんだよ。国家は国家ではないんだよ。名前と実体とがどんなに違うかっていうことはね、まあ、シェイクスピアあたりからの話なんだな。あの、ばらの花というものは、どういうほかの名前で呼ぶこともできるのだと、しかし、どんなほかの名前で呼んでもいいかおりがするという、シェクスピアの『ロミオとジュリエット』の言葉はね、実に、あれは政治的なことばだよ。安全保障条約というのは、どういう名前で呼ぶこともできるんだよ。戦争っていうものは、どういう名前で呼ぶこともできる。（いま四十五分です）あと十二分か、（ざわめき）いや、ぼくは東京へ帰らなきゃならないんだ、この四時の新幹線でね、だから、また来るよ。（笑い、拍手）

要するに、彼自身もね、けさ、あの新聞を見てね、自分にもほんの少しはわかるだろう。ぼくは、まだ、大学の教授にはね、少しはものを考える力があるんじゃないかと思うんだよ。佐藤栄作には、全然少しもないと思うがね。（笑い）だから、君たちの大学にしても、大学の教授なり当局なりは、政府じゃないんだからね。少しはものを考える余力があるんじゃないかと、ぼくはまだ期待しているんだね。これもはかない期待かもわからないんだがな。政府は、東大に向かって、東大は管理の能力がないと言ってるんだよ。それならば、政府に管理の能力があるのか。世間でだれかあるといえる人があるだろうか。佐藤栄作は、自分でもあると思えるだろうか。（笑い）思えるなら一べんどっかの大学の学長にでもなってみろ。ね、どういうことになるか。自分でやってみたらいいんだ。ありません。大学当局に管理能力がない。政府に管理能力はない。そうすれば、だれが管理するんだ。ぼくが言うんじゃないよ、これはね、佐藤栄作が言うんだよ。大学当局に管理能力がないというんだ。佐藤栄作、政府に管理能力がないだろうということは、世間周知の事実なんだ。そうすりゃ、あと残っているものは一つしかないんだよ。だれだい……（「学生だっ」の声）学生だ。（拍手）……

ぼくは、学生には非常に気の毒だと思うよ。大学を管理しなきゃならないなんという、よけいな仕事がふえちゃったんだよ。（笑い）ほんとうは、遊んでいるほうがいいんだよね。まあ、遊んでいる合い間に、少しは勉強したほうがいいんだ。遊んでいる合い間に少しは勉強するだけで、もう時間はありゃしないんだよ。それ以外に、大学を管理するなんてめんどくさいよ、これ。だから、そういう仕事が学生の肩にかかってきたということは、ぼくは学生のために喜んでるんじゃないんだよ。しかし、喜ぶべきことでなくても、やらなければならないことは、やらなきゃならないんだよ。そんなことが、朝日やサンケイにわかるのかっていうんだ。わからないんだ、全然。新聞は、あの記者が管理しているのか。あんなヨタ新聞はね。新聞は、新聞らしい新聞を出しているのか、毎日。

けさの毎日新聞、朝見ると、茆仁蔵君というのが、毎日新聞の東

京本社の編集局長になった辞令が出ていそね。この助仁蔵君というのは、東大の学生新聞の記者をやっているころ、ぼくんとこへよく来たんだ。戦争前だがね。だから、毎日新聞の東京本社の編集局長の助君は、ぼくはよく知ってるよ。学生時代には、りっぱな学生だったよ。しかし、ちょうどさっきの司法研究所とおんなじだ。学生時代には七％しか自衛隊は合憲だとはいえないんだよ。卒業すると、七％ぐらいしか違憲だとはいえなくなっちゃうんだ。助君も東京大学の学生のときには、りっぱな学生だったがね。しかし、いまはどうなんだろう。ぼくはけさ、はがきを書いたよ。

「けさの朝刊で、君が編集局長に就任したことを知った。そして、君は忘れたかもしれないが、数十年前、君は学生で東大新聞の記者をやっていたときからのことを、旧情を新たにしたと。日本の現状は危機に瀕している。したがって、言論の使命は日に重大を加えている。どうか、君が、その重大な使命をどんなことがあっても守ってもらうことを希望して、君の健康を祈っている。」というふうに書いたよ。これも、まことにはかない頼みだね。助君が、ぼくのはがきをもらってどんな顔をするかわからん、それはね。しかし、ぼくは、そういう意味では、最後の望みをまだ捨ててはいないんだ。しかし、残念ながら、その望みがあるかどうか、わからないんだよ。そういう現状なんだ。

しかもね、デカルトが言ってるように、「あらゆる理論は、アジテーションだ」と言ってるんだ。アジテーションというのは人を動かす。学問は、アジテーションなんだよ。人を動かさないような学問が、何の役に立つんだ。ぼくが言うんじゃないよ。デカルトがそう言ってるんだよ。（笑い）だから、朝日やサンケイはデカルトぐらい、たまには読んだほうがいいよ。いまの新聞、あらゆる新聞は、アジテーションでなければならないんですよ。いまの新聞はね、社説――あんまりこのごろ、社説がひどいんで、この間も朝日やなんかの首脳部に、どうだい、毎日あんな社説を書いて恥ずかしくないのかと。そうだろう。

さっき言いかけたように、明治百年といえば、日本でしなきゃならないことは、ただ一つだ。それは、日本国民全体としてだね、中国や朝鮮の国民に言いがたい悲しみを与えたんだよ。だから、一言、日本の国としてすまなかったと、今後、絶対そんなことはしない、と言ったほうがいい。実は、日本国憲法というのはそういうことを言い表わしているんだよ。日本が軍隊を持たないというのは、自衛権とか何とか、そういう問題じゃないよ。朝鮮や中国の国民が日本を許してくれるまでは、日本は軍隊なんて断じて持てないよ。そういう意味を憲法は含んでいるんだが。しかし、やっぱり、そういう憲法が怪しくなってきているんだから。明治百年には、ぼくは、日本の首相はね、明治百年にあたって、日本国民としてはただ一つ、中国や朝鮮の国民に言い難い悲しみを与えたんだから、この百年を機会に中国、朝鮮と国交を回復して――半分回復しているなんていうばかなやつは、君たちの中にはいないだろうな。これは、わかりやすくいえば、隣りのうちにはだんなと奥さんといるんだ。その奥さんとばかり仲よくして、だんなとは口も聞かないというのは（笑い）隣りのうちとしてのあるべき方法じゃないんだよ。まあ、朝鮮には、二つ政府があるといえるかどうか、南のほうは政府かどう

かわからないけれどもね。まあ、かりにだ、まあ、むずかしい議論はさておいて、二つ政府があるんだ。その一方とだけ条約を結ぶと、他方とは口も聞かないということは、朝鮮と国交を回復している状態じゃないんだよ。しかも、中国とは平和条約さえ結んでいないんだ。この間の戦争のあと始末なんかついちゃいないんだよ。だから、中国、朝鮮と国交を回復すべきだ。これは、ぼくだけじゃないな。だれかが、朝日かなんかに投書してたよ。あの明治百年にあたって、天皇が何か言ったがね。あの中に、一言も天皇が、中国や朝鮮に対して、日本はすまんことをしたということを一言ぐらい言ったらどうかと思うのに、一言も言ってなかったということを、だれか女の人が投書してたね。

この、国家がね、国家が次第に消滅していくというのは、一番はっきりわかるのは現在の日本だが、アメリカの現状もそれをよくらわしているよ。アメリカが現在、まだ民主主義だなんて思ってる人があれば、やはり、自分の頭を調べてみたほうがいいよ。アメリカは、現在、民主主義の片りんもない国家になってるんだ。この間のアメリカの大統領選挙のときに、民主党の大会のときに、シカゴでね、デモ隊と警察隊との間に非常に大きな衝突があったことは、君たちも知ってるだろう。あんまり大きな衝突だったんで、さすがにそれをうやむやにはできないで、ジョンソンがね、大統領が、特別調査委員会を任命したんだよ。それで、ジョンソンという人は、そのとき、何と言ったかというとね、「このシカゴの暴動の責任は、警察にあるのかデモ隊にあるのか、自分にはよくわからない」と。こんなことをわからんやつが、大統領をやってんだか。「しかし、いずれにしても、自分はあらゆる暴力に反対だ、」なんて、こういうばかなことを言ってるんだね。今の日本にもこういうやつがいるよ、「暴力はいかん」なんて、ばかの一つ覚えっていうんだよ、これをね。暴力なんていうものは存在しないんだよ。現に、その実例はだよ、シカゴの大暴動に対して大統領が任命した委員会が、ずいぶん長い間ね、およそ、一千二百人の証人に直接証言を聞いた。ドキュメンタリーの映画をね、七十時間も見た。そして、およそ、二万か三万の文書を調べた。そういう綿密な調査をやった結果、出た結論が何といってるか。「シカゴの暴動の責任は、警察にある。シカゴにおける警察は、ほとんど暴徒である。彼らのやっていることは、ナチスのゲシュタッポと全くおんなじだ」と言って書いてるじゃないか。

日本の機動隊がやっていることは、シカゴの警察のやったことと全くおんなじだよ。（拍手）うそだと思うなら、佐藤栄作は特別委員会を任命して調査してみたらいいんだ　そして、一千二百人ぐらいの直接証言を聞きね、ニュース映画を七十時間ぐらい見、二万か三万の文書を調べてみろ。結論は、日本の警察機動隊は暴徒である。彼らのやることはゲシュタッポのやってることと何の違いもないという結論が出るに相違ないんだよ。（拍手）

ぼくは、ついこの間、東大の安田講堂の中に入ったよ。東大の安田講堂や、日大の本部に自由に入れるような教授はいないのか、と朝日新聞はこの間書いていたがね。いるんだよ。それは、羽仁五郎という学者だ。（拍手）ついこの間、ぼくは正月の十三日に入ったんだ。それは、東大の安田講堂で日本大学の全学共闘委員会が報告

会を開いたんだ。その報告会で、ぼくに講演してくれと言ったんで、あの中へ入った。そのときに安田講堂の中は、まあ、少し誇張していえばね、ちりひとつ落ちてはいなかったんだよ　たとえば、ぼくは小便にいったよ。それから、便器の上にね、「吸いがらを投げ入れるな」と、「便器がつまったら封鎖はできないんだぞ」と書いてあったよ。（笑い）あれをね、あんなに長い間、封鎖し占拠をしているために、あの中にいた学生は、便器の中に吸がら一つ投げ入れることを許していなかったんだよ。安田講堂の中は、大河内学長がいたときもぼくは行ったことがあるよ。加藤代行になってから行ったことはないが。大河内君があそこで学長をやっていたときよりも、学生が占拠していたときのほうが、はるかにきれいになったんだぞ。それを、あの廃墟にしたのはだれだい。断じて学生ではない。機動隊が廃墟にしたんだよ。（拍手）こんな判断ができないやつは、もの言うのはやめたほうがいいよ。

多くのおかあさんがね、ぼくのところへも来るよ。それで、どうか学生が騒がないようにしてくれってんだ。おれが学生を騒がせてるんじゃないよ。（笑い）ぼくは　学生に、できれば、できるだけ騒ぐな、と言いたいよ。それは、ヘルをかぶって、ゲバ棒を持っている学生だってね、うちへ帰りたいんだよ、みんな。ぶるぶるふるえているんだよ。いかにこわくても、しかし立っているよりほかしようがないんだよ。われわれを守ることはできないんだよ。学問を守ることができないんだよ。そこで、ヘルを捨てて、ゲバ棒を捨てて帰れば、大学は消えてしまうんだ。大学は独占資本が占拠するんだよ。学問は腐敗する一方だ。現在の大学は、独占資本の支配の一本の柱に過ぎないものになっているんだよ。独占資本を一ぺんには倒せない。せめて、その柱は倒したほうがいいんだ。そして、それが独占資本じゃなくね、国民の幸福のための社会の柱にしなければならないんだよ。学問の責任は、実に重大だ。さっきから繰り返し言ってきたように。

現在の大学が、国民の幸福のための学問をやっていない、ということは、東大の政治学部の若手のホープである石田君が、この間の戦争で海軍に志願したということだけを聞いてもよくわかるよ。いや、石田君は、いまはそんなことを考えてるわけじゃないだろうがね。しかし、この間はそんなことを考えてたんだよ。そこから、今日どれぐらい進歩したか疑問だよ。石田君ばかり一人いうだけじゃないんだ。大学の学問が、いかに腐敗し、頽廃しているか。現に、君たちが聞いておる講義がね、はたして、学問的な講義を関西学院にしてもやっている教授が何人いるのか（「異議なし」の声）その教授にほんとうに学問をさせ、学問的な講義をやらせるためにはね、大学当局には、その能力がないんだよ。佐藤栄作にその能力があるはずがないよ。坂田何とかという文部大臣にその能力があるはずがないんだよ。だから、いまの大学が大学だと思ってるのは、あのおかあさんたちだけですよ。（笑い、拍手）それで、あのおかあさんたちが、ぼくに向かって、「自分の子供はあなたを絶対に信頼している。あなたが言ってくれれば、子供は大学に帰ると思う」と。「だから、どうか私の子供に大学に帰れと、あなたの口から言ってくれ」って言うんだ。おれもおかあさんには弱いよね。（笑い）しかし、帰れという大学がどこにあるんだっていうんだ。母親たちの考

えているものは大学じゃないんだよ。母親たちはみな言う、「むずかしいことはわかりませんけど」ってね。むずかしいことがわからなければ、黙ってるほうがいいんだ。（笑い、拍手）

問題は、非常にむずかしいんだよ。日本の大学は、過去において大せいの人たちが何度改革を企てたかわからない。あらゆる方法を尽くしたんだよ。三木清だってその一人だよ。大内兵衛なんかだってその一人だろう。そういう人は、みなつかまって、牢屋に入れられちゃったんだよ。中には獄死しちゃったんだよ。君たちのいまの運動にはね、大学を改革しようとして逮捕されて、投獄されて、獄死した、日本の学問上の先輩の運動も入っているんだよ。

しかしね、去年、アメリカのコロンビア大学。これは、いわゆる名門なんという下らない名前だが、…名門中の名門のコロンビア大学の学生が、大学を占拠したんだ。理由は三つでね。第一は、大学の軍事協力は許せない。第二は、アメリカの大学が、ニグロを、黒人を差別していることは許せない。第三には、この大学の戦争協力反対、人種差別反対を学生が動けば、すぐに警察が入ってくる、とれに絶対反対だ。そのためにコロンビア大学の学生が、大学を占拠し、封鎖したんだよ。で、非常に大きな問題が起こったんだよ。で、いまね、きのうでも、京都大学の学長の奥田君に向かって、ぼくはマイクを通じて言ったんだが、封鎖を解除しようとする理論の根拠はどこにあるんだと。イギリスのロンドンのロンドン・スクール・オブ・エコノミックというのは、世界でも有名な大学だよ。日本の大学の教授なんかが、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスにいって学生になるんだな。その、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスといえば、世界でも最高の大学じゃないか。それをこの間、学生が占拠しているじゃないか。京都大学なんか、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスみたいになりたいと思ってるんだろう。そうすりゃ向こうは、いま占拠、封鎖されているんだから、自分とこが封鎖される（笑い）……封鎖以外に方法はあるのかと、あるなら、とっくに解決されてるよ。（拍手）

ぼくがね、ぼくが大学の主体は学生だということを書いたのは、もうすでにね、四十年ぐらい前なんだよ。岩波新書で書いた、『ミケランジェロ』、あれは、戦争の前に書く本だからね、大学論なんて表題を出したら、とても検閲が通らないんだよ、あのころにね。だから、『ミケランジェロ』という題で出すと、みんなが、まあ、芸術家の伝記だろうと思ってね。（笑い）あの中に　ぼくは、イタリアのルネッサンスのボロナ大学の例を引いて、ボロナ大学は、学生がつくった大学なんだと、……もう時間がなくなっちゃったから話せないが、たとえば、治外法権がね、大学は治外法権じゃないなんて、自民党のさっきの、ばかだかちょんだかしらないが、そういう閣僚がいうよ。荒木公安委員長なんて、何もわかっちゃいない。彼は、公安委員長として、警察の公平を守っているのか。公安委員長の資格はないよ。警察を、政府の意向に反対するものに向かって警察を発動するっていうのは、警察じゃないよ。そんなものは、公安委員長の資格はないんだ。その荒木なんかがね、「大学は、治外法権なんかあるはずがない」って言うんだ。ばかをいえ。ボロナ大学は、治外法権を持ってたんだ。現に、その証拠には、ボロナ大学には、大学の法廷があったんだよ。ボロナ大学は、武装の権利を持っ

てたんだよ。学問の自由のためにね。何も、大学は、積極的に武装をしょうとは思わないんだよ。しかし、相手が武装してきたときに、もはやこれまで、といって学問の自由を捨てることはできないんだよ。（拍手）

そういう、大学の治外法権にせよ、りっぱな歴史的な根拠があり、理論上の根拠があるんだよ。ところが、この大学の自治とは学生の自治だ、ということを、東京大学が、現に、三年前まではあくまで否定していたんだ。有名な「大学の自治に関する東大の見解」なんというね、自分でも恥ずかしくなるだろう。で、あれが出たときに、東大の学生がぼくんところへ来て、「東大当局は、とんちんかんなものを出した。まあ、批判してくれるのは羽仁先生ぐらいしかないから書いてくれ」って言うんで、ぼくは東大新聞に「大学の自治は、教授会の自治ではない、学生の自治だ」ということを書いたんだよ。三年前にね　だから、ぼくは三十年前に、大学というものは、学生が主体だと、そして三年前まで、ぼくが、大学の自治は学生の自治だと、東大の見解は認めなかったんだよ。それが、いまではあたかも大学の自治において、学生の自治を否認し得るものは、だれもいないでしょう。政府でさえもいないでしょう。だれの力でそうなったんですか。封鎖・占拠の力ですよ。（拍手）ぼくが、どんな名著を書いたってね、ぼくがどんないい論文を書いたって、東大が絶対に承服しないんだ。政府が承服しないんだ。しかし、安田講堂が占拠されたために、安田講堂の今日の姿は、決して屈辱の廃墟の姿ではないのですよ。安田講堂は廃墟と思ったことによって、日本に初めて学生の自治を明らかにしたんだよ。（拍手）ぼくはもちろん、京都大学や関西学院が廃墟となることを希望するものではないんだよ。しかし、大学の自治を明らかにすることができないで立っている大学が、何で大学ですか。（拍手）

この、村岡剛なんていうね、実にやっかいな男だよ。（笑い）あれがこの間ね、「憲法という一枚の紙が残って日本国民が滅びてもいいのか」と言うから、「おれは、そういう国民になりたい」って言ったんですよ　約束を重んじて滅びなきゃならないものなら、おれは滅びたほうがいいよ。約束を踏みにじって生きていることに何の値打ちがあるんだ。大学が、建物が立って、大学の自治が失われて、何の光栄があるんだ。ぼくの言ってることは、アジテーションだろうか。（「そうだ！」の声、笑い）

もし、そうだとすれば、それはデカルトが言ったように、「あらゆる理論は、アジテーションだ。」（笑い、拍手）

大学の根源的本質とは何か

最高の学問は学問の自由

大学の問題について、君たちに話をするというのは、ある意味では逆なんで、大学とはどういうものか、君たちは自分で知っているはずなんだがね。ところがどうもそうでないらしいんだね。

大学っていうのはどういうところかっていうと、学問をするところだなんてばかなことを言っている者があるんだ。大学は学問をするところだなんてね。これはまるで、犬が西を向けば尾が東を向くってようなものなんだ。「どうだ、犬が西を向けば尾が東を向くんだ、わかったか」なんてね。そんなことを言ってる奴はどこか頭がおかしいんじゃあないかな。

学問をするって言うんじゃ、小学校も中学校も高等学校も、みんな学問をしているんだ。しかし大学は日本の法律の面からいっても単に教育の機関じゃないんだよ。社会じゃ、まずこの点が理解されていないようだね。つまり大学生は勉強していりゃあいい、教えられることを覚えていればいいんだなんてね。しかし法律の面からいっても、大学ってところは教育の機関であり、同時に研究の機関なんだ。つまり学生が研究に参加しているんだね。大学そのものが最高の学問をやる所なんだ。

最高の学問をやるっていうのはね、電子工学とか、エレクトロニクスとか、そういう既成の学問を最高とはいわないんだ。それはどんどん進歩しちゃうからね。デパートで売っているようなものを最高の学問とはいわないんだ。最高の学問では学問の自由ってことなんだね。まあ、いまの日本の保守党政治家なんかには解らないんだよ。

岩波新書に東京の慶応義塾の、慶応義塾って大学は福沢先生の創てた学校なんだけれども、先生にはいろいろおかしな先生がいるもんで、池田潔って先生が書いた「自由と規律」ていう本が岩波新書にあるね。中学校の学生なんかが先生のいうことを聞かなくなると先生が、これを読めっていって出す。だからベストセラーになっているんだ。しかしね、自由と規律なんて本の表題をつけるのを見るとね、あの池田君は自由のことも規律のことも全然解ってないんだね。つまり自由は最高の規律なんだよ。だから「自由と規律」っていうんじゃあなくて、「自由が規律」っていう本ならね、一つの思想ですよ。自由と規律なんてね何とかと何とかなんてやつはだいたいおかしいね。そうだろ、公害を防ぐ、しかも産業の発達と調和してなんてね。公害と産業なんてものが二つあるんじゃないんだよ産業がすなわち公害なんだよ。産業は金を儲けるために公害をやっているんだろ、その公害は防ぐ、しかし産業と調和してなんて、甘えるのもいいかげんにしろ。ね、日本の産業はそんな了見で資本の自由化に太刀打ちできるものか。産業自身が公害なんて絶対に出さん、

ていうぐらいにね、それくらいの気持がね、産業家としてはなければ困るよ。

自由と規律ではない、自由が規律なんだ、自由が最高の規律なんだ。だから最高の学問ていうのは何かっていえば学問の自由なんだよね。ところがその学問の自由とかという問題は普通、政府には分からないんだ。だから大学の自治という問題にしてもそうだね。大学の自治っていうのはなぜ必要なんだ。ところがね、この日本の作った漢字ては、まったく意味がない、ナンセンスなんだな。実際漢字ては象形文字だからね、意味はないんだよ。大学てのを大いに学ぶ、どういうことなのかナンセンスですよ、下から読むと学んでかくなる。

だいたい大学を就職機関だと考えている。確かに大学は就職機関である性質もありますよ。しかし直接の例をとれば、国立大学がね就職機関だなんて大きな声で言えるかどうか疑問だよ。国立大学というのは国民の税金でできているだろう。その税金を出す人の子供はね、大学へ行けないんだよ。人の子供が大学へ行って就職するために税金を出してやるっていうことはちょっと筋が通らないよね。だから就職機関という性質が本質となってしまったら、大学というものは成り立たないんだ。

大学は学問する者の団結の場

で、英語の場合にはまだナンセンスじゃないんだ。英語で大学のことをユニバーシティていうだろ。これは、元来ラテン語で〝ユニベルレタス〟という言葉だね。このユニベルレタスてのはね、今の英語に直すると、なんていうかと言えばユニオンていうんだ。ユニオンていうのは組合とか団結とかという話だね、だから大学ていったら何をする所かと言えば学問をする所じゃなくてね、大学とは第一には団結するところなんだよ、何のために団結するのかと言えば学問のためなんだ。社会にはいろんな組織、いろんな団結があるよね、例えば労働組合、労働者の条件を守るための団結なんだ大学は学問の自由を守るための団結なんだ。で、なぜ学問の自由を守るために団結が必要かというとさっきいったように学問の自由というのは、まあ社会や国家の現状と一致するものじゃないんだ。いわゆる現状とは一致しないんだ。まあ、池田勇人って人が「経済のことは俺に任せてくれ」なんていってね、それで日本はどんどん不景気になっちゃった。大学の経済学は池田勇人の経済学程度でいることはできないんだよね。大学の学問ていうのは佐藤栄作程度の学問で留まることはできないんだ。だから学問の自由というのはどうしても政治ね、政治権力の圧迫を受ける。したがってそれに抵抗して行くにはね、団結が必要なんだ。

小学校でね、二に二をたせば四になるなんて、別に政府は弾圧しやしないよね、おまわりさんがびっくりして飛んで来るなんてことはないんだよ。しかし最高の学問てことになるとおまわりさんが飛んで来るんだよ、したがってそれに抵抗するには、一人ではね、現に僕なんか最初に捕ったのは昭和七年、日本は戦争をやるべきじゃないってね、まあだいたい日本の学者で戦争に反対しないっていうのは、ちょっとどう言うのかね、学者であればあの戦争に反対しないではいられないね。もちろん日本にもそういう学者はいたんだ。しかし、当時団結がなかったからね。個人的に弾圧されただけで捕っちゃうだけだ。だから戦後、学問の自由が憲法で保障されそれに基づいて大学の自治というものが保障されているのは、学問の自由

というのは団結によってじゃなきゃ守れないんだ。で、ユニベルレタスという言葉がユニオンていう意味だ、これだけのことでもねはっきり認識されれば、一九七〇年の安保条約の問題なんかについても正しい解決が望めるんだよ。ところが日本の朝日・毎日・読売なんかの新聞でも、大学生がストライキをやるだろう、そうすると大学てところは学問をするところだって書くんだ。その他は何もしなくていいなんて書くんだね。無学だからそんなことを書くんだ。僕の本でも読めばね、ユニベルレタスていうのはユニオンだってことが分かるんだよ。

大学の本質が団結ってことにあるんだからその意志を表わすのは団体行動になるんだ。だから大学生のストライキていうのは大学の自治を守るね、行動なんだ。

大学の自治は保障するっていうけれど大学の自治をどういうふうに主張するんだ。ストライキは認めないていうね、それは弁当を食って金を払わないようなもんだよ。大学の自治ていうものを承認するなら大学生の団体行動を承認しなければならないんだ。労働組合のストライキとかデモンストレイションていうものは労働法によって保障されているよね。大学生のストライキていうのは別に法律によって保障されているものじゃないんだ。昔から自民党の代議士なんていのはね、法律にないことはね、やってもいいと思っているんだよね。それで税金の還付金なんてものやるんだ。法律で禁じちゃないからね。

しかし人生てものは法律以上のものなんだよ。ことに大学なんてものは法律によって成立しているもんじゃない。人類の歴史的進歩によって成立してきているものなんだ。大学の自治というのは習慣法だね。法律以上のものなんだ。これは、ヨーロッパの大学の歴史を見ても、日本の大学の歴史を見てもそれが表われている。

ヨーロッパの大学で一番代表的なのはルネッサンの頃からできてきたね、イタリーのボローニャ大学なんてのがそうだ。ボローニャの大学なんか名前からしてユニベルレタス、スコラリウム、学生の組合ていうんだね。だからユニバーシティていう言葉には学問ていう意味は全然入っていないんだよ。組合ていう意味なんだからね。だからそのあとにもっていって学生の組合、学生の組合が大学なんだしたがってボローニャ大学の場合なんか学長も当然学生組合の議長なんだ。それから第三には教授の任命権なくてものも学生のユニオンが持っているんだね。それから第四にはね、大学が治外法権を持っていたんだ。この頃にはね、ルネサンスの時代にはね、それだから大学の中に警察が入って来ることはできない。

大学は治外法権的性格を持つ

現在の日本でも大学の中へ警察が入っちゃならない。どうして大学の中へ警察が入っちゃならないのか。その意味をはっきりね、君達は認識しているかどうか、なぜ大学の中へ警察が入ってはならないか。で、一昨年位だったかな、国際大学学長会議てのが東京であった。メルボルンの総長とかね。ケンブリッジの総長とかという人はみんなラジオやテレビでも「自分の大学は学問の自由や大学の自

治を第一とし、原則としている。したがって大学の中へ一歩も警察を入れない」てやったらね、東大の大河内総長はねそういう演説をしなかったんだね。できないんだよ時々、警察を呼んで来るもんだから、今の大学の歴史の上に成立している慣習法で、大学の中へ警察は入れないんだ。ロンドン大学にせよ、メルボルンにせよ、ケンブリッジにせよね。

日本でもそれを法律的に保障したものがないでもないんだ。その一つは昭和二十七年の文部次官通達てのがあるんだ、当時は学生のデモが非常に盛んだったんだ。であんまりデモが盛んだからね、警察が後からついて来るのが精一杯だったんだね。今はデモの方が小さいから警察が囲んでしまうけどね。それでそれが大学に戻って来るだろ、それに連れて警察も大学のなかへ入っちゃうんだね。それでしょっちゅう問題が起こったので、文部次官通達てのが出て、警察が大学へ入る場合は諒解を得て入る。つまり〝こんにちわ〟ていって入る、黙って入っちゃだめだってんだね。あるいは大学の方から来てくれといわれたら入れっていうだね。それ以外のね、すなわち諒解を得た、大学の要請を受けた、それ以外の場合は入っちゃだめだっていうように文部次官通達にもなっているんだ。まあ保守党の国会議員なんか文部次官通達は法律じゃないなんていうがね、法律以上のものなんだ。ところがね、これが治外法権かどうかっていうことになると、今日の日本の大学は別に治外法権を主張しているわけじゃないんだよ。けれども治外法権的な性質を持っているんだ。そりゃ何のためかというと学問の自由のためなんだ。

学問の自由ていうものは非常に敏感なものなんだよ、だから君達はまだそういう実感があるかな、つまり警察権力ていうものは強制的なものなんだね。でさっきの自由と規律なんて考えだとね、学問と警察とは仲よくやったらいいような話になっちゃうだよ。本当の学問の自由ていうのは、権力の姿が現われたら消えちゃうんだ。ね。それ位デリケートなものなんだ。本当の学問ていうのは警官がその辺をブラブラしていてできるような学問はあまりたいした学問じゃないんだよ。で、この強制的なね、警察の表わしているものは腰に下げているピストルとかね、それから手錠とかね、そういう強制的なものと、それから学問の持っている自由なものとは相入れないんだよ。だから大学の中へ警察が入っちゃだめなんだ。したがってルネサンスの時代には治外法権を大学は持っていた。その証拠には大学の中に法廷があってね、大学の中で起った事件は、大学の中で学生が裁判していたんだよ。大学の中で何か事件が起ってね、それで交番のおまわりさんを呼びに行くってみっともない話だよね、大学の中には法学部もあるだろ。それから文学部の人で推理小説ばかり読んでいる人も居るんだからそういう人が探偵になったりね、裁判官になったりしてね、それで大学の法廷でやりゃ趣味と実益を兼ねるよ。教育と実際のね、まあ本当の教育っていうのは半ば実際だがね。しかも大学の中には殺人事件がおこるなんてことはまあないんだ。とういうふうにポロ！ニャ大学なんか法廷があったんだ。

ポポロ判決の意味するもの

この検察官なんていうのは、僕は法務委員を長くやっていたから検察官を絶えず監督していたんだが、勉強する人は少ないんだよね酒を飲む人は多いんだ。仕事が愉快じゃないんだよ、小物しか捕えることができないんだよ、大物は捕えられないんだよね。だけど佐藤栄作みたいな奴をひっぱればさぞ愉快だろうね。まあ中にはね、多少勉強している人もいる。今は弁護士になった最高裁の検事なんかやっていた泉義雄って人がいたこの人がいまのいろんな事件があった頃に論文を書いた『警察と大学』っていうんだ。それを僕は少し読んでみたらね。「現在の日本の大学は治外法権を主張せられるものではないだろう」。それはそれでいいんだよね、ところが彼はその後へ持っていってね。「歴史上にまだかってそんなことは聞いたこともない」てね、書いているんだね、しかし彼が無学だから聞いれことがないだけなんだよ。僕の本で岩波新書で出ている〝ミケランジェロ〟でも読めばちゃんと書いてあるんだ。しかも岩波新書なんてあんまり高い本じゃない一冊一五〇円ぐらい、検察官の月給でも買える本なんだよ。知らないことを書くと無学がばれちゃうだけなんだ。大学は本来治外法権を持っていたんだよ。現在は治外法権を主張するものじゃないが、しかし警察がそう簡単に入るべき所じゃないんだ。これがまあ歴史的にね世界の大学がどういうふうにできてきたのかとことなんだ。しかしそれはルネサンスの頃の大学でね、現代の日本にゃ当てはまらないと思う人があるだろうが、これがそのまま当てはまるという証明がね、有名な「ポポロ事件」という事件なんだ。

これは昭和二七年に東大で起った事件なんだ。で、東大の自治活動の一つの劇団ポポロていう学生の劇団だね。それが松川事件の芝居をやった。まあ今は松川事件といっても問題ないが その時は有罪死刑なんていってね。問題があった。だから警官がね、私服の警官が「こんにちわ」て言わないで入っていたんだね。だから「だめじゃないか、大学へ入っちゃ」て言ったら「俺は警官じゃない」て言うんだ。

日本の警官はしばしば擬装するんだね、われわれ国民が擬装するとね、検察官はすぐ起訴するんだよ。しかし警官が擬装しても検察官は起訴しないんだよね。

まあ関西大学の法律学は誰が教えているか知らないが、東京大学の法律学なんで怪しげなものだよ実際、だから学生は証拠を取らなきゃだめだっていうんで、警官は警察手帳を持っているんだ、それを開いちゃ鉛筆をなめなめこう書いているんだ。不愉快極まるんだ大学の中を私服の警官がね、だから手帳を持っているかっていって手をつっ込んだもあったんだよねあったから「これを預る、警官じゃないか」ていって預ったんだ。学生の方からいえば預る、警官の方から言えば強奪されたんだよね。

それから洋服のボタンが取れたって言ってるんだけれど、まあ取れかかっていたんでしょう。普通ならなかなか取れないんだよ。で暴力行為など取締りに関する法律の違反、それから公務執行妨害て

事で、二人の学生、福井君と千田君。ところが福井君がやったのか千田君がやったのか解らないんだよね。多勢でやったんだからね。で、これを起訴した。

その判決が昭和二九年に東京地方裁判所で出たんだね。「この学生は有罪ですか無罪ですか」「まあ気持はよく解かる。大学の中へ警察が黙って入っちゃだめだ。そういうのを許しておくようじゃ学生とは言えない」と、なかなか認識のある学生だね、君たちの模範とするに足るよ、「しかし警察手帳を取ったのはまずかったね。何か他にやりようはなかったかね、警察手帳を取ったのは、無罪といいかないんじゃないか。」なんて人は今晩よく考え直してくれよね、僕がいうんじゃないだよ、その東京地方裁判所が無罪、裁判所が無罪だっていうのに学校が有罪だなんていってもしょうがないよね。その裁判官がね、警察手帳をとったのは公務執行妨害だね、おまわりさんが手帳なくては商売できないんだ、けれどもね、警察官の職務の執行ていうことと、大学の自治・学園の自治ていこと、両方ともこれを法律上の利益とみなしてこの法益を比較してみると、後の方がいちじるしく重要かつ大だっていうんだよ。警官のやっている仕事はもちろんね、大切なことだが、しかし大学生のやっている仕事はもっと大切なことだっていうんだ。裁判官にこんなことといわれて少し具合が悪くないかい。大学生としてね、俺のやっている仕事は警官のやっている仕事より重大なことだっていう自覚をもっているのかね。そういう自覚がありゃ五月危機なんて起こるはずがないんだよ。裁判官が言うんだ、僕が言うんじゃないよ。

それから第二はね、およそ自由とか権利とかというものはね、座っていて守れるものじゃない。これを不当に侵害する者があった場合にはね、まあ合法的に守れとか適法なる国家の機関によって救済されたり、救われるというけれど、それを待つことなくね、それをその場で阻止しなければだめだっていうんだ。僕が言うんじゃない、裁判官がいうんだよ。で、これはね、直接行動の理論なんだよ。日本ではね、直接行動てのはいけないことになっているんだな。それから何でも合法的にやれってことをいうんだよ。裁判がみてね。「少しこれは困ったいきすぎだ」と思っているんじゃないんだ。

で裁決では「自由や権利を不当に侵害されようとしている時に、適法なる国家の機関によって救済されるのを待つことなくその場でそれを阻止しろ。それをやらない者は自由や権利を投げ捨てるのに等しい」

なかなかむずかしいような顔を君たちはしているがね、これを大学の自治だとか学問の自由とかというとむずかしいんだがね、少しエロチックな問題についていえばすぐ解るんだ。夏の夜なんかね、若いお嬢さんが暗いところを歩いているだろ。そこへ変な男が現われて自由または権利を不当に侵害しようとするんだな、そうするとそのお嬢さんは適法なる国家の機関によって救済されるのを待っちゃいられないんだよ。その場でこれを阻止しようとするんだな。そこへ評論家とか朝日、毎日、読売とかの新聞が現れてね、「お嬢さん、自由や権利を不当に侵害されているような気持はよく解かる。しかし適法なる国家の機関によって救済されるのを待ちなさい。あくまで合法的にやれ」ていうんだね。

それから最後にね、裁判官がいうんだ。「本件に関する限りに一

学生の自治は大学の職務と何ら異なっていない」ていうんだ。検察官がね「大学生は勉強してりゃいいんだ、学問の自由とか大学の自治とかは先生に任せておけ」ていうんだ。世間もそういうだろ。けれど裁判官は「そうじゃない。専門の学問なら、教授は教える立場で学生は学ぶ立場ということもあろう。しかし大学の自治とか学問の自由とかという問題については学生の自治は大学の職務と何ら異なることはない」

この三つの理由でこの学生を無罪にした　で検察官がこれに不服で控訴したんだ。そしたら昭和三十一年は東京高等裁判所が同じ理由で無罪にしたんだ。検察官がまた不服で最高裁に控訴したんだね

それで最高裁でひっくり返っちゃったんだよ。実際にね。最高裁判所は検察庁に三度も「もう一べんいってみろ」てやられるとね、三度もいう勇気がないんだよ。だいたい最高裁の裁判官ていうのは頭もだいぶぼけてているしね、年もとっている。気も弱くなっているんだ青年時代のようなね、良心もなければまた勇気もないんだ。そういうのに三度もおどしをかけるっていうのは裁判官よりも、おどしをかける検察庁が悪いんだ。年よりなんてそうおどかさない方がいいんだよ。

で、ひっくり返っちゃたってことはね、さっきの警察官の職務の執行と学問の自由とどっちが重大だってのがひっくり返っちゃたってんだから警察の方が大事だっていうことになっちゃたんだ。そうなったら何でも警察へいって聞いて来いってことになっちゃうんだな。学長や総長なりにもよく解んない大学の問題までもね。それから「自由や権利が不当に侵害されるとき、適法なる国家の機関によって救済されるのを待つことなく」ていうのを待てっていうことになっちゃうんだからね少なくともお嬢さんだってそんな判決には承知しないよね。

それから「本件に関する限り一学生の自治と大学の職務と何ら異なることはない」ていうのは「大学の学生は大学の自治とか学問の自由とか安保条約とか砂川基地とか、そんなことは気にしなくていいんだ、勉強してろ」ていうことになっちゃったんだ。「勉強してろ、勉強してろ」ていうだけで学生が納得しりゃいいよ。納得しないかも知れないんだ。納得しない場合にはその理由があるんだということを社会が理解する必要があるね、これが大学というものはいったいどういうものかということについての基本的な点なんだ。

学生会館の管理は学生の手に

学生会館の問題なんかでも同様ですよ。たとえば東大の大河内君なんかが「学生会館は国有財産だから学生に管理を任せるわけにはいかない」ていうんだ。こういうのはね、大学建物論ていうんだ。けれどもユニベルレタスという言葉は建物をさしたことはないんだ。今だかってね。〝ユニベルレタス〟ていうのは常に学生をさしているんだ。学生のユニオン。だから語源も知らないんだね。学生会館は国有財産だからていってね、火事で燃えちゃ大変だなんて、焼かないためにあるんじゃないんだよ、学生に使わせるためにね。で学生が使うためには学生が管理した方がいいんだよ。現に大河内君は

今年の卒業式に「最近の大学は責任感のおそろしい薄い人間を卒業させている」て言うんだろ、大学の在学中に何も、学生会館の管理でもさせるかというとさせないんものね、責任を全然任せないんだから、責任を任されない人間に責任感が薄いのはあたりまえですよ、だから責任感の強い大学生を送り出そうとするならば、在学中に学生会館ばかりじゃない、ことによったらもっとね、大学運営そのものにも学生を参加させるということが教育上適当なんだよ。そうだろ、大学生てのはやがて社会に立つんだ。社会に立てば社会とか国家とかを管理するんだよ。国家や社会にはいろいろやっかいな問題があるが、学生会館にはそれ程やっかいな問題はないんだよ。だから佐藤栄作にせよ何にせよ、東大在学中に学生会館の管理運営をしたことがないもんだからね、それが総理大臣になっちゃったから国を管理するということがどういうことなんだか解らないんだよ、国民の税金を自分のフトコロの中へ入れることだと思っているんだ。大蔵省の役人や文部省の役人は税金を自分の金だと思っているんだよね。それを私立大学の授業料値上げは大変だから、教授のベースアップの金を文部省が保障してやろうってね。何だ、文部省の金じゃないよ、国民の金だよ。しかもそれを教授のベース・アップにヒモをつけてね、援助する。そうすりゃ教授が文部省のいうことでも聞くと思っているのかな。もっともそういう教授もいることはいるようだがね。

これがまあ、その他の授業料の問題でも、さっき言った通り、事実、大学生は半ば社会に必要な仕事をやっているんだよ、つまり学問・研究というね。学問の自由ていうのは社会が必要としている仕事なんだよ。それを大学生がやっている。だから本当はさっきもいった様に、警察官の職務より大学生のやっている仕事の方が大切なんだと裁判所が認めるんだから、本当は大学生におまわりさんの月給よりか少し、いやその倍ぐらいの月給を払う方がいいんだね。

まあ現に、社会主義の国じゃそういうふうになっている。社会主義の国ばかりじゃない。イギリスとかイタリーなんかでも四、五年前に「大学生手当て支給法」て法律ができた。金のある大学生にまで手当を支給することはないぜ、頭はいいけど金がないっていう様な人達には国が手当てを支給する。

その、大学生は半ば社会人だということだね。それで社会において活動するのにね、大学時代に責任を与え、自治を認め、学問の自由に参加するっていうことの意味がどんなに重大かね、解ったと思うんだ。

そういう大学を守る、そういう学問を守るためには、そういう学問ね、そういう大学をつぶしていくような力と戦わないってことはできないんだよ。だから朝鮮大学がつぶえるのを黙って見ているってことは、自分の大学がつぶれるのも平気だ。あるいは安保条約が続けて行なわれるっていうのは、日本の軍事予算で学問の予算が削ずられていくのを平気でいるということができるというのはまあ大学生らしい学生とはいえないね。そういう大学自身の存在に関係ある政治現象だね、まあ現在ではたいてい、あらゆる政治現象が関連しているんだ。それに大学生が関心を持つことは当然でしょうね。

この間サルトルも日本に来て言ったように知識階級のように見えて実際は知識階級、すなわちそういう精神的自由だね。精神的自由

の立場に立つということのできる条件を持っている人はそんなに多くないんだ。その中で日本ではね大学生がかなり大きなパーセンテージを占めているんだね。

だいぶ長い間、話を聞いてくれてどうもありがとう、僕の話はこれで終り。

座談会

羽仁五郎氏を囲んで

大学闘争　反戦闘争　高校闘争

万国博

京大闘争の出発

D　特にきょう、羽仁先生に来ていただいて、あした講演していただく前に、現在の状況をきちっと把握していただいたほうが、お話も実りある形で聞けるんじゃないかというふうに思うんです。ぼくたちの現在の報告を先にしたほうがいいんじゃないか、と思うんです。封鎖をやっている諸君から先に、簡単に経過と、それから現在の局面を…

A　経過に関して、ぼくは熊野寮に入ってて、寮生なんですけれども、昨年の段階でいわゆる東大闘争というのが、急に右寄りの方向という形で集約されていく段階で、京都大学においても同質の矛盾というのを持っている、東大闘争との連帯、そういうふうに闘争を組む必要があるというのが、一般の学生の間で論議されていたわけです。そのときにちょうど十三年間にわたって、京大寮闘争というのが、繰り広げられているわけですけれども、具体的な事実から言うと、京大の場合は国立大学の全国平均からして、寮生の割合というのは、非常に低いわけです。しかも現在、〇管規とか負担区分とか言ってるわけですけれども、そういう形でもって文部省側から、非常に大きな攻撃がかけられているというふうな中にあって、いわゆる寮闘争というのは、一つの転機を迎えてきたわけです。昨年の十二月の段階で、医学部も第三次研協闘争に入る、あるいは文学部において、文学部の新館の地下の解放という問題で、学校側ともめているというふうな内容から、そういう各学部、あるいは教養とか

寮なんかにおける問題――教養なんかの場合ですと、いわゆる東大の振り分け入学の問題等々があったわけですけれども――、各学部のそういう運動を形成していこうという中にあって、一応全学的な連絡会議みたいなものが持たれたわけです。その全体の連絡会議等々とあわせて、寮というのが独自に寮闘争というものを闘っていくというふうな形の中で、去年の十二月の末に、団交が持たれたわけですけれども、結局、その団交というのが全く内容がなく終ってしまった。そのときに封鎖という話が出たんですけれども…

羽仁　どういう要求なの？

A　現在、三項目という形であらわされているわけですけれども、要求の一つは無条件新寮獲得、無条件に新しい寮を建てろということを言ってるわけです。○管規負担区分に関して…

羽仁　なんだ、○管規負担区分というのは。

A　○管規というのは、「○○大学学生寮管理規程」というのを、文部省が各大学に通達しているわけです。それから二・一八文部次官通達というのがあって、それが各大学にいってるわけですけれども、そこの中で受益者負担の名のもとによって、負担区分というのがあって、水光熱費、あるいは寮費の値上げが行なわれているわけです。そういう攻撃というのを、一応京大の寮においては、はね返しているわけですけれども、そういう条件をつけない新しい寮を、一千人寮ないしは二千人寮を建てろということを、現在要求しているわけです。それが一つで、もう一つは、京大における二十ヵ年の長期計画というのを、総長が出したわけです。それに対して、それは学生の意見を反映して[illegible]

した。それから第三番目に要求されているのが、経理の全面公開、すなわち現在、大学自治と言われているところの内容というのが、基本的には文部官僚による財政権の掌握で、空洞化しているという内容を暴露するために、経理の全面公開というのを要求しているわけです。その三つについて即時認めろという形で、寮闘争に入ったわけです。

それで去年の末の段階でやる予定だったんですけれども　東大闘争の影響で、各諸潮流等々が東大に行くいう形でもって、基本的に軍事関係で維持できないという判断で、ことしにのびたわけです。これで各学部のそういう運動を下から形成しつつ、寮闘争の発展で学生部を封鎖するという形で、十六日に総長団交を打ち切り、そして団交に結集していた部分で、学生部封鎖を決議して、学生部封鎖に入ったわけです　その過程でもって、基本的には日本共産党民青諸君が一つの軸として、そういう即自的な学生の反発というのを利用して、学生部封鎖解除を要求しているというふうな形で、十六日以降、運動が繰り広げられているわけですけれども、寮闘争委員会というのを中心にして、諸潮流が一緒になって、問題の本質というのを暴露していく中から、京大の総長が現在、国大協の会長になっているわけですけれども、そういうことの内容を暴露していく中から、各クラスとか各学部において、そういう闘争組織というのが、徐々に形成されているわけです　最初は代々木も基本的にはゲバルトで解除するという形で、ゲバルトをかけてきたわけですけれども、しかし現在は撃退している。代々木は学校側に対する解除宣言という

中心とした収拾策動というのに乗った場合、今後、国大協を推進するのはピンチであるという状況なので、現在、のんでないわけです。それで職組とか生協とか、あるいは同学会という京大の学生自治会があるわけですけれども、それが全部一緒になって五者共闘というものをつくっているわけです。五者共闘というのを軸にして　総長団交というのをこの三日間ほど連続してやっているわけです。それで基本的には封鎖解除のみを目的とするという形で、寮闘争に対する展望とか、あるいは今後の京大の再編過程に対する闘いというのは、全く提起し得ないで、ただ総長に対しての団交で、要求するのは封鎖解除だけであるというふうな形で、しかも現在的には、どういうことをやっているかというと、学生部に対する電気、水道、ガス、電話等々の一切のものを切れ、われわれが封鎖解除をやるから、それに対するヘルメットだのゲバ棒だのを提供しろ　いうことを要求している。彼らのそういう運動というのが、全く現在の大学の矛盾というのを暴露する方向じゃなくて、むしろそれを隠蔽する方向に、完全に動いているわけです。それに対して、寮闘争委員会を中心とした部分というのが、問題の本質を単に戦術提起だけで終わるなという形で、宣伝をやってるわけです。教養においては全部で百何クラスあるわけですけれども、現在十五クラス程度で封鎖支持決議があがっている。最初の段階ではほとんどのクラスが、封鎖解除決議だったんですが。

東大闘争を継承せよ

A　教養のクラスで、クラス決議という形であがっているのが十五クラスぐらいあるんです。最初は特に代々木の拠点クラスを中心にして、学生の即自的な反発というのを利用して、封鎖解除決議というのをあげていったわけです。現在はむしろ、その逆の方向に出ている。熊野寮と吉田寮というのが、寮闘争委員会の中心になっているわけですけれども、おとといの寮生大会で熊野寮の場合は百四十対百ぐらいで、吉田寮の場合は百十対三十ぐらいで、封鎖断固支持、貫徹という、あるいは民青の反革命的暴力粉砕という決議をあげているわけです。そういう形で、寮闘争そのものが単に寮の闘争というだけじゃなくて、基本的には現在の東大と同じ質を持ったところの闘いであるということが、次第に大衆の中に浸透しはじめてくる。それに対して、各諸潮流というのは、一応反民系は民学同右派を除いて結束して、寮闘争支援という形で、寮闘争委員会を中心として、闘争を組んでいるわけです。それに対して民青というのはさっき言った五者共闘を中心にして、特に五者共闘の中でも教職員組合が、なんか非常にハッスルしている。

協議会方式の偽瞞性

一つは上部からの徹底的な締めつけと、一つはデマゴギー宣伝によって…非常にハッスルしていて、デマゴギー宣伝と、それから下部に対する締めつけによって、運動というのを形成していこうとしているわけです。

C　デマゴギーというのは、どんなデマゴギー？

A　たとえばデマゴギーの主要なものというのは、東大闘争が完全に機動隊の暴力によって、粉砕されているという中で、東大闘争で生き残った全学共闘会議の連中が、全部京大に来て、京大を封鎖するとか（笑い）、あるいは特に医学部と文学部というのが、まだ代々木のヘゲモニーが貫徹していない自治会として残っているわけですけれども、医学部においては、医局解体ということをあげて、現在の医局制度というものに対して対決をしていく。現在無給医として働いている無給医局員たちも、統一青医連という形で、青医連の中へ強制的に加入させていくというふうな戦術を立てているわけです。その過程で、日本共産党のそういう全面的な政治路線というものが、破産していかざるを得ないという状況の中で、特に病院職組というのが、東大の医学部の全共闘の連中が来て…

羽仁　医学部だからね。

A　全共闘の連中が来て、病院を封鎖するとかいうふうな、きわめてナンセンスなデマゴギーを流しているわけです。そういう形で、一つは例のトロッキスト暴力学生という宣伝とあわせて、学生ないしは下部職員の即自的な反発を利用して、みずからのヘゲモニーを、再度貫徹していこう、あるいはそこに起こっている闘争というものを、抑圧していこうというふうな方向でもって、現在動いているわけです。そのために、かれらは三日間連続の総長団交というものをやったわけですけれども、しかし基本的には若干こちらの方針、ないしは暴露というのが、下部に浸透しつつあるために、彼らの路線というのは、現在きわめてあいまいになっていて、ますます狂暴になっていくであろうという可能性はあるわけです。

羽仁　医学部のは、だいぶ前からの続きだからね。

A　去年、一応第一次研協闘争というのが行なわれて、先生にも一度講演に京大へ来てもらった。去年の場合、ぼくらも東大と同じような…

羽仁　つまり、さっきも話があったけれども、日本大学の場合は使途不明金三十億とかなんとかいう、みんなに非常にわかりやすい問題があると同じように、医学部の問題もみんなにかなりわかりやすい。

A　そうですね。

羽仁　つまり卒業しても当分無給…給料はあんまりみんな問題じゃないんだな。要するに勉強が全然できない。それで教授、助教授のあとを、ただ金魚のうんこみたいにくっついて歩いて、やれ鉛筆とかなんとかって、全く下級技術者、技術者でもないな。小間使みたいなことをやらされている。やっとそのインターン制度をやめて、今度は登録医というの？

A　報告医制度。

羽仁　報告医と言うんだけれども、今度は逆に厚生省、大きな国立病院というのに、ほとんどお医者はいかないんでしょ、このごろはね。待遇が悪いから。待遇が悪いというよりも、人使いが荒いから。人使いもちゃんとお医者として使われる分には、相当荒く使われても、おもしろいからいいけれども、そうじゃない、全く事務員みたいなように。ぼくは想像するんだけれども、国立病院というのはなにしろベッドが千ぐらいあるだろう。千ぐらいあるところへ、大学を卒業したばっかりの報告医というのが入って、どういうことをさせられるかというと、ぼくはよくみんなに説明するけれども、一日朝から晩まで検便をやらされるようなことになっちゃうんだよね。だから、医者だか検便技術者だかわからないことになっちゃう。しかも検便をやっても、その検便の結果、自分がそれで診療の方針を立てるとか、それでよくなったとか、悪くなったとかいうことがあれば、検便だっていいけれども、千人ぐらいの患者の検便ばっかりやってるんじゃ、しかも、それを二年もやらされたら、いいかげんいやになっちゃうんだよね（笑い）。だからインターンのほうがまだよかった。報告医はもっとひどい。しかもそれは、医学部の持っていた人事権というのを、今度は厚生省がとっちゃうということになるというんだな。いままではなんといっても医学部の人事でやっていたから、多少文句も言えたけれども、今度、厚生省が人事権を持っちゃうから。これはずいぶん前から政府の厚生省は　国立大学の医学部の持っている人事権というものを、とってしまいたいと。だから、ほんとうは東大でも医学部長の豊川君なり病院長なりも、青医連の諸君と利害は共通している点もあるんだよね。人事権を厚生省にとられちゃうというふうなことに対しては　一緒に闘うべきはずなのに、医学部長をやめれば、どっかの大きな国立病院の院長になるという、目の前のこれから先の利益があるもんで、医学部が人事権を失っても、やがて自分が国立大病院の院長になれば、人事権を握れると。握れやしないんだけども、参加できるというようなことで、いま青医連と一緒に闘うという気持ちにならないんだね。これは一般の人にも非常によくわかるんだよね。それから今度は看護婦さんの問題が、そこへくっついてくるから、なおよくわかるんで、日大は使途不明金から築き上げたけれども、東大の場合にはやっぱり医学部から始まって、それの交渉の最中に、その交渉は少し強制的なつるし上げというふうな形をとってきたというので、機動隊が入ってきた。それが全学に波及して、前は医学部が医学部の旧館を占拠していたんだけれども、今度は安田講堂の占拠になったというようなことは、京都大学でも同じだと思うんだな、やっぱりその関係はね。今度の東大の闘争で一番特徴的なのは、この前の安保闘争のときは、法学部とか経済学部がある意味で先頭に立って、医学部なり、ことに工学部なんかは全然出てこなかったが、それが今度は反対に医学部が先頭に立って、実力部隊は工学部にあって、法学部やなんかは最後までストライキに入るのをいやがった。したがってまた一等最初にストライキを解いちゃったというのは、法学部にはそういう具体的な問題がないんだよ、事実。つまり労働者としてのあれがないんだな。医学部は全く労働者、労働条件という問題があるから、それは労働者にもわかりやすいし、一般の人が聞いて

も…。ぼくがいま言った朝から晩まで検便やってなきゃならんということは、実際あるんじゃない？

A　あります。

羽仁　ぼくは想像して考えたんだけれども、（笑い）。そうすると、みんな聞いたやつは、なるほどかわいそうだというんで（笑い）みんな一ぺんに同情するね。それから日大なんかで、薬学部の話が非常にみんなによくわかるんだが、日大の薬学部というのは――薬学部というのは大体女の子が多いんだ、薬剤師だからね――なにしろ七人にてんびんが一本しかないというんだよね。だから人が薬を調合しているのを六人で見てる。そんなことを幾らやったって、いつまでたったって、薬剤師になれるとは思えない、かなわん、しんぼうできないというのが、みんなによくわかるようだな。やはり京都大学の場合も、結局医学部の問題を、できるだけほかの学部の連中にもわかるようにしていくことが…。やっぱりデマばかりではないよ。ただ京都の警察だって、いまでもやってるかどうか知らないけれども、湯浅乾電池の湯浅佑一が公安委員長かなんかやってるんだ。あれも若いときは共産党のシンパで、奥さんは築地小劇場のなんかやってたんで、敗戦直後にはずいぶん共産党に金なんかも出したんだけれども、その後だんだんおやじのあとを継いで、社長になるにつれて、資本家としての気持ちが非常にはっきり出てきた。それで警察の問題で、例の有名な橋から学生を落っことした問題だの、何度もぼくは交渉したけれども、最近ではとてもはしにも棒にもかからんようなあれになっているんだから、やっぱり医学部が封鎖をやれば、警察力が入ってくるということは考えられるんだ。ただ全く東大と同じ形になって、これは公式主義ってみんな言うけれども、公式どおりになってくる。

D　去年の場合でもそうなんですが、京大の奥田総長というのは、やはり大河内ほどばかじゃないということになるんですね（笑）。そこが扱いにくい。

A　いわゆる民主的なポーズというんですね。

羽仁　あれは医学部？

A　農学部です。

D　それと学生部長が、案外ものわかりがいい。

A　学生部長は医学部の…

D　だから、へたに機動隊を入れたりしない。しかも五者共闘という形で…

政治警察としての機動隊

羽仁　京都にも機動隊というのがあるの？

全員　あります。

D　それは安保のときにやはり

羽仁　あれは全く自衛隊と同じ。機動隊法なんという法律はないんだよね。いつのまにか法務委でささえちゃったんだ。ぼくは参議院で法務委員をやっているときは、あんなものは許さんがね。やっぱりいまは衆参両院にろくな法務委員がいないんだよ。だから機動隊法なんという法律を出したことはないですよ。いまの日本の法律では、警察というものは、いわゆる政治警察、つまり政府の方針と

違うからということで、それを押さえるというふうに使える法規がないんですよ、事実。だからこの間、東大の加藤君が、生命の危険がある場合にだけ機動隊を入れるというのは、警察法によれば、人殺しがありそうな場合には、警官が来るという警察法の精神からきて、そういう場合なら問題がないということで、加藤君は法律家だからね。そうでない場合には機動隊の使用ということについて、法律上疑義があるんだ。裁判所で争った場合にも、勝てるか負けるかわからない。加藤君はそれをきわめて体裁よく、人命に危険が迫るような場合だけは入れるなんというのは、法律家だから非常にずるく考えて、その場合だったら警察力の行使をやっても、どっから見ても非難されるということはないという意味なんだよね。だからその点は京都の場合にも、あんまり人命が危険に瀕するということを、口実にされるようなことは、やらないほうがいいんだがね。

しかし、これは最近、東大の例を見ると、そういうふうに言うのは、ぼくは長年の共産党の支持者なんだから、あんまり共産党の悪口は言いたくないんだが、民青がそういうデマを飛ばすんだね。ひどいのは、全学共闘会議では、あまり始末におえないやつは、日大に引き渡しちゃう、それで消さしちゃうなんてことを言うんだよ。

それで、きのうの夜中にぼくのところへ東京大学職員組合から電話がかかってきて、きのう御茶ノ水のある喫茶店で、東大の緑会、つまり法学部の自治会のメンバーが十人ほど、日大の全学共闘会議の連中に拉致されていって、いまだに帰ってこないと言うんだね。それで生命の危険があるかもわからないから、羽仁先生のほうから日大全学共闘会議のほうに、そういう危険がないように、そして早く帰してくれるようにあっせんしてくれないかと言うから、とんでもないとぼくは言ったんだよ。第一、どういう証拠があるんだ。そういうデマがこの間からも盛んに飛ぶ。実にぼくは不愉快だと思っているんだが、どういう証拠があるのかと言ったら、その中から一人逃げてきたというから、一人逃げられるようなら、たいした危険はありゃしない（笑）。この間の東大なんか一人も逃げられやしないんだよ。一人逃げられれば心配はないよと。でも先生、まじめに聞いてくださいよと言うから、どっちがまじめなんだと（笑）。けれどもあんまりあれでもいかんから、とにかく連絡をとるよと言って、そのときに東職に誤解があるといけないから念を押しておくが、ぼくと日大全学共闘会議とは、なんの関係もないんだから。ただぼくは昔の先生だという程度の関係しかない。組織上の関係はなんにもないんだから、組織上連絡をとってみるというふうに、お約束をすることはできない。ただ知り合いもいるから、聞いてみるという程度のことだから、それは誤解しないように頼むぞと言ったら、わかりましたと。それですぐゆうべのうちに連絡をとったら、けさ返事がきて、日大の全学共闘の返事なんだが、羽仁先生の講義を聞いてるわれわれが、聞くも不愉快なことをやると、羽仁先生はお考えですか、という返事がきたんだよ。逆にとられちゃった（笑）。おれもやっぱり東大のほうに、少し考え方が近いのかなと（笑）。これはすまなかったと言ったら、いえいえ、別に先生から一本とるつもりはないけれども、そういうデマが多いんです、なんかけんかやったんでしょうけれども、調べることは調べて、決して先生がご心配になるようなことにはしませんからと言うんだね。これは一つの

例なんだよ。

そういう意味のデマを飛ばしたときの対策は、考えたほうがいいと思うんだ。やっぱりだれか生命の危険に瀕するからということを口実に、機動隊が入ってくることはあり得るんだよね。だから生命の危険に瀕しているなんてデマが飛んだときには、すぐ、それはデマだという反対のあれをぜひやること。これは東大は非常にまずかったね、自分たちがやるんだからね。これをやったときには、必ずデマを飛ばした責任者、民青だから、共産党だから、代々木派だからということで争わないで、だれでもそういうデマを飛ばすやつは許さないというような自衛組織は、つくっておいたほうがいいかと思うよ。必ずそのデマを飛ばしたのはだれかということ、突きとめればわかるような、そういう自衛組織を持っててもらいたいんだがな。だから各クラスに、それを専門に、ほかの仕事はしないで、ある仕事を分担していると、しょっちゅうそこにいるわけにはいきませんから、なんにも仕事を持たないで、ただ、そういうデマを防ぐというやつ、ほんとうは新聞記者が、そういうことをやるべきはずなんだけれども、新聞記者はいまは反対に、デマのほうにばっかりくっついちゃうから（笑）。京都大学新聞の新聞記者が、ほんとうはそういうことをやるべきなんだけれども、手が足りないだろうから…

D　足りないですね。

羽仁　ですからあなた方の中で、ボランティアで、一人なにもしないで、ただみんなの動き、それからみんなの言うことを聞いているという、こっちのほうもスパイだね。スパイというのは言葉が悪いが、みんなの動きを見てるという人が、どうしても一人必要ですね。というのは、だれが飛ばしたか、なかなかわからないんですよ。

腐敗せる法学部

D　先に京大関係を中心にしたいと思うんで、J（法学部）の方…。

B　Jの取り組みというのは、大体さっき羽仁先生が言われたように、法学部というのはエリートコースというか、官僚出身のコースを歩いてるわけですね。民青の巣くつになっているんですね、京大においては。

羽仁　早く封鎖解除して、卒業しようじゃないかという…。

B　大体大学の個別的な闘争というんじゃなくして、大学闘争というのは全体としては、日本が帝国主義で復活していくなかで、東南アジアを侵略していき、それをもとに帝国主義というか、第三次世界大戦を展望し得るようなところまで持っていくんだ。そっからきてるんだという感じで、それが帝国主義の中心的な政策に対する粉砕と闘っている部隊に、労働者と、ここに高校生がいますけれども、高校生と学生というような部隊が、いままでだったら反戦青年委と全高連を目ざす高校生と全学連というぐあいで形成されているんですね。そういうような統一戦線の中の学生が最も先端として…。

羽仁　それじゃだめだよ。それよりやっぱり法学部にも問題があるに相違ないんだよ。

B　法学部にもそりゃそういうことはありますからね。たとえば法学部においても、学長に対する拒否権の問題とか…。

羽仁　いや、そればかりじゃなく、たとえば司法官になろうと思っている人間は、学生運動をやったやつは、研修所へ入れないとかなんとかいう問題があるんだよ。だから法学部は法学部自体の問題を…今度、東大が失敗したのは、それだよね。それで、いま君のような一般国際情勢みたいなもので動かそうとしても、それは闘争が盛り上がっているときは、それでやれるんだが、ちょっと形勢が悪くなってくると、国際情勢なんかどうでもいいやということになってくる。

B　そうじゃなくして、出発点としては、そういうようないろんな問題をさがし出してきて…。

羽仁　いろんな問題というよりも、つまり法律家としての矛盾があるんだよ。それはたとえて言えば、学生運動をやったやつは、司法研修所へ入れないとか、司法研修所へ入れなければ弁護士にもなれない。それから裁判官にも検察官にもなれない。民間の会社でも、今後はそういう締めつけがひどくなる。不景気になるから、ひどくなるにきまってるんだ。それから法学部の中の講義の問題でもあるんじゃないかと思うんだ。

D　カリキュラムの問題。

羽仁　そうなんだよ。この間、ぼくは京都大学新聞を見て、びっくりしたんだけれども、京都大学の…

B　政治学部の政治学系の教授が全然いない。

羽仁　それで丸山真男を呼んでこようなんてね。東大じゃ鼻つまみになってきたから、丸山真男を呼んでこようなんて、京都大学というのはやっぱり…

B　それは大体民青系の自治会がやっているんですけれどもね。

羽仁　そうなんだよね。だから丸山真男なんかの政治学でも、つまり猪木だからね、これは。だから猪木のようなものになる気はしないだろうというような点で、学問の内容上からも、やっぱりそれは一番強いよ。

B　政治学の講義というのは、いままで京大の学生においては、全く受け入れる気もないし…

羽仁　猪木みたいに学校は留守にしちゃって…

B　マスコミにパーッといくというのはね。高坂とか猪木とか、そういうのばっかりなんです、京大というのは。

羽仁　東京ばっかり行ってんだよね。

D　そして東京から丸山を呼んでくる…。

羽仁　ちょっともまじめに学生の相手をしてないということは、われわれよそから見たって、なんだ、この猪木、首にしちゃえというようなものだよね。

個別闘争の盾を越えよ

B　そういうようなものに対する闘争を出発するということは、たとえば寮の場合だったら、さっき言った光熱費の問題とか、○管

規の問題とか、いろいろあるのですけれども、もっと東大闘争のあの過程を見ていったら、そういうような形で出発していても、全体として、いわゆる国家との全面的な対決になった場合に、さっきぼくが言ったような思考から立てない以上、出発点のときから、そういうような内容を知らないと、これはだめだということで

A　だから軸としては、一つはそういう国際状況にしろ、日本の状況にしろ、これはもちろん宣伝していく必要というのはあるわけだよ。

羽仁　ことに国家の問題はいいね。国家の問題は自分の専門でもあり、また現実の問題でもあるんだから、つまり日本の国家という保守半永久政権というものの正体暴露は、政治学部なり法学部なりの学生がやらなければならないことなんだ。ところが、その教授たちは、それに対して全く無批判だな。それで抽象的な憲法論議みたいなことばっかりやってるんだ。憲法を守るぐらいのことは、赤ん坊だって知っているんだよ。だけど、どっから守っていいか全然わからないほど、ひどくなっているんだ。そういう問題については、全然教授がやってないという……そこはやっぱりその学部の特色へ絶えず持ってきたほうがいいね。君が話したように、そこまでいくのが悪いというんじゃないんだよ。そこまで網を広げていくのはいいが、それをまた法学部なり政治学部なりに持ってきて闘えば、かなりみんなが最後までね……やっぱりいまだってあれだろう、東大で一番急所は、いわゆる一番意識のはっきりしない学生にとって、結局どうなるんだというと、あの闘争以前の大学に返るんだろう。そのときに、なんだ、またもとの大学になるのか、それでがっかりしてくる、と。そんならもう少しやったほうがよかったんじゃないか、そんなら封鎖解除しなかったほうがよかったんじゃないか、それならストライキを続けたほうがよかったんじゃないかというふうに、わからせるよりほかないな。

B　だから闘争の集約した段階で、出発に戻っているという形に、いままでばずっとそうだったんですが、それでなくて、なんか残すというのは……

羽仁　東大のようになるぞというのは、東大のように機動隊が入るぞというんじゃなくて、東大のように機動隊が入れば、またもとの東大になっちゃうんだよね。明治、大正、昭和の大学になっちゃうんだな。

B　だから、そういうものを突破するような論理を、たとえば法学部だったら国家の問題から、日本はどういうぐあいに帝国主義として復興しつつあるのかということを含めてやっていくという形で……

羽仁　文部省の問題は法学部、政治学部では、大いに取り上げたほうがいいね。今度の東大の確認書というのを否認しろという動きは、文部省から出るわけだ。それがなにも知らない関僚、荒木とか、

坂田は文部省出身じゃないもので、文部省は坂田をつついてもだめだというわけで、むしろ官僚はだ……

B　難尾とか、ああいう……。

羽仁　ああいうのをつっついて、確認書なんか有効にしたらとんでもないというのは、さっき医学部のA君が言ったように、寮の管理規程なんという、文部省の規程というのは無効になっちゃうからな。それが無効になっちゃうと、文部省から大学の中に、事務員を入れることもできなくなっちゃうだろう。いま文部省の言いなりほうだいを、大学でやるというわけだから、文部省からだれか行ってお世話しましょうと、事務員なり、事務局長なり、学生課長なりが入ってくるわけだ。そんなことじゃない、大学と学生との合議できめちゃうんだということになれば、文部省から役人の古手を連れてくる必要がなくなっちゃうんだよ。だから、全く文部省の官僚のなわ張り意識でもって、あくまで大学の自治を妨害するんだな。これは法学部や政治学部の連中はお手のものだから、医学部と反対にそれで学生を啓蒙していく。文部省の手を離れない以上、大学の自治はできないんだ。大学の自治ができない以上、学生がやりたいということは、絶対なにもできないんだということだね。

医学部の矛盾

A　医学部のことなんですけれども、ぼくらは二月の初めから第三次研協闘争に入ります。

羽仁　研協闘争って、どういうこと？

A　研修協約闘争。現在、ぼくらがかかげている内容というのは、医局解体という形で出しているわけですけれども、その内容というのは、全学化する場合は、いわゆる講座制に対する……現在の大学というのが、教授をヒエラルキーの頂点とするところの講座制である。それが医学部の場合には特に医局がくっついて……

羽仁　その講座制、それから医局制の一番一般の人にわかりやすい実例は、ぼくはこの間、看護婦雑誌で、サンケイの医療担当の金子君という記者と対談したときに、そういうふうに言ったんだけれども、京都大学でも同じだろうと思うんだが、東大なんかでハウプト・ミッテ・ネーベンというやつがあるんだよね。病院で夜、ハウプト、つまり助教授か助手のかなりほんとうのお医者がいるんだ。夜中に患者が急変を起こすだろう。絶対に行かないんだね、そのハウプトは。それで指図するんだよ。あの患者はこういうことだから、きっとこうなったんだろう。だから君が行って、大体こういうふうな措置があるから、その措置のうちで、君が適当だと思うものをやれよと言って、助手かあるいは副手にやらせる。それがネーベンというやつなんだ。そのネーベンが行くかというと、絶対に行かないんだよ（笑）。それでいまの卒業したばっかりの無給の報告医を呼んで、おまえ、勉強になるから行ってみろ。大体こういう病気なんだ。こういう変化が起こったという。これについては、さっきハウプトから言われたとおりの三つぐらいの措置があるから、そのどれがいいかは君が判断してやれ。やるからたいてい死んじゃうんだよ。死んじゃうと、その責任は一番最後の報告医にきちゃう。報告医と

いうやつはまだほんとうの医者じゃないから、診断書は書けないんだよね。だから、その全責任はとれないんだ。しかし、それでもって点数になっちゃって、それから先、上の言いなりほうだいになならなきゃ、どこへも就職できないっていう実にひどい、御殿女中よりもっとひどいね。首へなわつけたようなことになっちゃうんだね。だから文句を言ったら、おまえはインターンのときに、ああいう失敗をやったけれども、おれが責任をとって、おまえを助けてやったじゃないか。だからおれの言うこと聞けというふうになる。このハウプト・ミッテ・ネーベンというやつは、もうお医者や看護婦はみな知ってるんだよね。これはだれが聞いても、それはあんまりひどいということは、わかるんだな。

A　ですから、現在、医局解体というのをあげているわけです。それを軸として今度の闘争を医学部の一回生から、現在、四十二年度卒業生がつくっている四二青医連というのがある。それが一緒になって、四十二年、四十三年卒業生は、去年の研修協約でもって、現在、研修をやってるわけですけれども、研修ボイコット、実際は研修というのは患者を見てるわけですから、診療ボイコットになるわけですけれども、それから学生は授業ボイコットで闘う。本庄という外科の教授なんですけれども、それが一貫して青医連弾圧をやってきたというので、外科一の本庄追放という形で、まず医局の問題というのを、そこで暴露していく。そして、その中で現在の医局制度に対して、ぼくらはそれを否定していく。現在、外科一封鎖を一つの軸として対決していこうという方向で、医学部においては寮闘争とは全く別個な形ですが、ただその場合でもぼくらの主軸は、やはり国大協路線粉砕であり、産学協同路線否定である。有名な話なんですけれども、武田薬品というのはアリナミンで現在みたいに大きくなったわけですけれども、その診療効果というのを研究したのが、京大病院であるというふうなことで、現在、薬品会社との結合というのが、公然の秘密になっているわけですよ。だから、そういう産学協同という内容は、京大医学部の中にあるわけですし、単に工学部だけの問題じゃない。そこで、ぼくらの闘争の軸というのは、各学部あるいは寮なんかで起こってる闘争と結合していくということです。課題そのものはぼくら独自の課題なんですけれども、その中でクラス、大衆等々を中心にして、そういう宣伝を入れていく中から、現在、ぼくらのかかえている本質的な問題はなにかという形で、全学闘争と連帯していく。一月の末から、特にことし卒業する四回生はあさってからストライキに入るわけです。

占拠の理論的根拠

D　ストライキ体制は、もうできてるわけですか。

A　四十四年の卒業生がありますから、四四青医連がまず最初に入って、それをバックする形で、医学部とすでにできてる四二、四三という青医連が、ストライキに入るという形での運動、入った段階ですぐ外科一封鎖をしていくという、封鎖というのは明らかになっているわけです。ですから外科研究生の研究施設とか資料とかいうのは、すでに持ち出されたわけですけれどもね（笑）。

羽仁　それはまずいやね。日大は一等最初に封鎖をやったもんで、日大の機密書類を全部接収したわけだ。これはもう実際大学側にとっては、致命的なんだよ。だから、つまらん弾圧をやった日には、日大はそれをばらしちゃう。ここだけの話だけれども、ずいぶん意外な機密書類があるんだね。やっぱり日大の全学共闘の連中はえらいよ。非常に慎重に発表しないんだ。発表しないほうが相手には打撃を与えるんだな。発表しちゃうと弁解の余地があるけれども、発表しないとどの程度までものをとられたかということが、よくわからないんだよね。だから、うっかりあんまりひどい弾圧をやると、それをばらされるんじゃないかと……直接には佐藤栄作関係の機密文書、それから代々木関係なんかのも、当然ある。そういう意味じゃ、占拠戦術というのは少し古くなったんだね。

A　すでに占拠というのが、一つの学生闘争の形態になってしまったですね。

羽仁　そうなんだ。

A　ですから問題があるところでは、すでに自分がお先にとっていっちゃう（笑）。

羽仁　だから、全くなにか独創的な新しいことを考えなきゃだめだというのは、あれでもよくわかるんだがね。

C　東大では押えたんでしょう。「これがやつらだ」というパンフレットが、二回ほど出ました。だから戦前からの学生運動の弾圧の歴史をずっとつづった機密書類を押さえて、それを発表した。

D　京大の場合は、どちら側も対応が非常に速い。異例のスピードですね。

E　そうですね。

A　ぼくらは外科一封鎖するぞという形でもって、いまいってるわけで、それに対して、一つは学校側の反応というのがあるわけですけれども、もう一つは、日本共産党側があるわね。むしろそれを逆に利用しようとするのですね。いわゆる東大型のイメージというのが、大衆の中に必ずあるわけです。それを利用する形で、病院封鎖が行なわれるぞというデマ宣伝を流していく。さっき言ったわけですけれども、その内容については。

羽仁　本部占拠をやらなければならないという理由は、そこからくるわけなんだ。ただ学部の占拠をやっていても、文書は逃げちゃうんだた。本部だと、そこで仕事をしているんだから、ほかへ持っていくわけにいかないんだ。だからそいつはまた重要な資料もある。それで、できるだけ早く本部占拠ということにいかざるを得ないんだ。占拠の理論というものは、理論よりも実践を先にやり出しちゃって、われわれはそれを見ながら、理論づけをあとからやってるようなことなんだ。ぼくは占拠には全く新しい戦術的な根拠があると思うんだよ。

D　一つはやっぱり一たん大学の機能をとみる。とめたところで、とにかく現在の大学の荒廃ということを暴露する。非常に復雑な機構になっているものですから、その機構が自動的に動いている中で、これはとてもどうにもできないという慣性というか惰性が、人間にはあるわけですが、それを一たんとめたら、人間は自分の頭で考えるというか、そういう点もあるような気がするんですけれども、もう少しやっぱり……

羽仁　やっぱり占拠の問題は、各学部で積極的に、いきなり占拠しちゃうというよりも、どういうふうに占拠するとか、あるいは占拠をどういう意味でやるということの認識を、できるだけ深めていくということが必要になってくる。それをしないと、民青なりなんなりに占拠を解けと言われた場合に、どういう必要があるから占拠をやるんだということを、一般学生に説明ができないんだよね。一般学生に、ただああいうところへ立てこもって、鳥の巣城みたいな、安田城という城に立てこもっているという印象を与えるのはまずいね。なぜ占拠する理由があるのかということの説明がないと、占拠を解けと言われたときに、いや解かないというだけになっちゃうから。解いたらどういうことになるかというほうの説明はできるわね。解いたら闘争の武器がなくなっちゃうんだから、相手の言いなりほうだいになっちゃうわけだろう。

助手・院生の闘い

D　では次に大学院助手共闘の方に…。特にきのうの段階で、「封鎖の思想」ということを、われわれは考える必要があるんじゃないかと、という討論もありましたので、ぜひ一度発言してもらったほうがいいと思いますが。

E　若干、できる過程のことについて申しますと、京都大学では現在非常に沸騰してましてね。去年と一月では全然違うような状況が出てきてしまった。これが寮の今度の封鎖へ、相当の影響力を与えたということがありまして、これから実際を申し上げるんですけれども、できる過程では非常に悲観的な話でした。ぼくも含めて三名が出かけたわけですけれども、実際何名集まるか非常に疑わしい。しかし、やらねばならんという気持が非常に濃厚でした。それは日本大学や東京大学の一年間というか、去年ずっと行なわれた闘争の客観的に生み出したものを、どう考えるか。それに対する対応が非常に深刻にわれわれに突きつけられておるという人々が、やはりおりまして、たとえば人文系の若手の助手たちとか、あるいは大学院生の若手の部分とかいうのがおりまして、そういうので、実際激烈な闘争がなくても、ともかく現在の大学体制を突く必要がある。そういう形の永続的な組織をつくってやっていく必要があるだろうという観点から出発して、つくり出したわけです。その過程で一月の呼びかけ状を出したんです。

D　十二月ですね、最初に集まってやられたのは。

E　やろうと考え出したのが十二月の末でした。そういうことで現在では寮と一緒になっちまって、封鎖をやっているということになっていったわけですが、やっぱり主要な関心事は、研究内容とか研究者の主体とか、そういうような、いわば内面に深く突き刺さるような問題が、非常に濃厚でした。そういうところを、いまも東大の都市工大学院とか助手見解とかいうもので、ひしひしとみんな感じていたようなんです。それで都市工のような諸問題が京大にあるのかないのか、実際上、全貌がつかめなくて、どうなるかわからなかったわけですけれども、きのうは結成大会をやりまして、その宣言もきょう出したわけですけれども、やっと全学的な話に拡大した

わけです。結成大会を開いてみると、驚くなかれ、ものすごい勢いで集まってくるわけです。あらゆるところで、ぼくたち予想もしなかったような諸問題が、ポンポン出てくるということで、工学部、理学部のが一番多いですね。もちろん医学部もあるんですけれども、医学部はまた独自にやっています。ほんとうに予想もしないような、普通だれも知らないような研究室の中で、ものすごい闘争が激烈に行なわれておるというようなことも出てきました。たとえば動物学教室とか宇宙物理とか…

D　それから数学。

E　工学部じゃ機械、土木、建築。

E　数学のようなところでも、助手たちが結束して、教養部の非常勤講師問題とか、そういうようなやり方に対して拒否していく。教養部の現在のカリキュラム編成に対して、トータルな視点を出していくというような、羽仁先生もびっくりするような、数学のところへさえ、そういうことがあったというようなことなんです。

羽仁　数学というのは手短に言うと、どういうこんなんですか。

E　教養部の数学理科系のクラスは、かなり数学の時間が多いですね。それで教養部の専任の数学の教官だけでは、とうてい足りないので、数学の助手が応援にいくわけです。助手というのは、大体国立大学の場合は講義は持たないということになっておるんですが、事実上学部の数学の助手連によって、ほとんど数学の時間を埋められておる。しかも、その助手の賃金たるや、一時間二百四十円という、散髪屋より安い賃金をもらっていっておる。そして、従来の慣例どおりダラダラいっておるならば、教養部はそれで時間が一応埋まってるから、教官の新しい増員もされないということ。自分たちは新年度から、四月以降教養部への応援体制を打ち切る。

羽仁　医学部と同じようなものだね。驚いたね、全く。しかも教養部で教える数学なんて、おもしろくもなんともない。教科書に書いてあるようなことを、ただ何度も繰り返すんだから、いやになっちゃうだろうな（笑）。それで自分の勉強する時間がなくなって、ほんとうは助手として研究室でやるべき時間がなくなっちゃう。低賃金の高等学校教師みたいにやられるわけでしょう。それはおもしろいね。

E　教養部の数学の全時間数の半分は、学部の数学の助手の応援でやってるという状況です。

E　ほかの、たとえば大阪大学から、神戸出身の助手をやってる人が、非常勤で来るとかいうことがだいぶありまして、そういう人々…

羽仁　それで、潔なんてやつは、いばりだすんだな（笑）。

E　数学の教室で月曜日に会食をやるそうですね。そのときには助手なんというのは、弁当をボソボソ食うだけで、なにも言えない。そういう雰囲気が長い間に固定しちゃって、どうにもしかたないという…。

羽仁　なるほどね。

変革の妨害者＝民青

C　それでどうなんですか、さまざまな考え方を持っている人たちが集まってると思うんですけれども、それだけに関心があれば、民青系と共産党系と言われている人たちは、そういうのに、どういう関心を示しているのか、あるいはどういう反応を示しているのか。それから論理の問題とすると、具体的にどうしようとしているのか。たとえば数学の問題で、共産党系の人たちもいまは入ってるわけですが、一緒になって。

E　全然入ってないですね。

C　どういう理由でですか。

E　どういう理由かというと、現在の封鎖の問題がからんでおるわけです。ぼくたちは封鎖で奪取する、そしてできればもっと広げるべきだと、自主管理方式を提起しまして、それに対して、猛烈なる攻撃があるわけです。一緒にできんわけですよ。小さい問題であれば、たとえば大学院の研究室改善運動などなら一緒にできますけれども、全然そういうような問題では…

羽仁　日本大学の場合の使途不明金三十億なりなんなりというところぐらいまでは、一緒にくるんだが、それで占拠するというときに、占拠すれば機動隊が来る、だから占拠はするなというけれども、しかし占拠でもやらないことには、いくら追及したって、いや、決して不明じゃないとか、それは詳しく説明すればよくわかってもらえるんだとかなんとか、ふだんこんなのどうの言って、どまかしちゃうんだ。だから日本大学の場合に、学校の機密文書を占拠したというのは、理論上やったというよりも、実際上の必要からやったんだね。ほんとうにそれは使途不明金なのか、説明ができるのか。幾ら聞いたって、ふだんこんなことなど言ってるから、それなら帳簿を見せろということで、占拠をやろうというと、そのとき共産党は、占拠をやると機動隊が来る、だから占拠をやったらいけない。だって、やらなきゃ、使途不明の問題は片づかないんじゃないかというんで占拠をやったときに、共産党は全部外へ出ちゃったんだ、日本大学の場合は。そういう形で外へ出て、あのとき参議院の小笠原貞子さんの選挙応援のほうへ、全部行っちゃったんだ。あのときはほかにやることがあったから、よかったんだね。今度東大の場合には、ほかにやることがないもんで、また中へ入ってくるわけなんだな。だから実際の問題として、問題はいま言われるようにごく小さな問題ならば、一緒にやれるんだよ。しかし根本問題になると、どうしても権力にタッチしてくるわけだ、大学の根本問題は。それになれば、大学の本庁へ入らなければならない。総長と幾ら団交をやったって、総長はなんにも材料を持ってこないんだからだめだ。ほんとうの材料をわれわれに公開しろということになると、占拠をやらざるを得ない。占拠をやると機動隊が入るにきまってる。そうすると東大の安田講堂のようになっちゃう。だから、やめろというところで、共産党の立場がかわっちゃう。どうして共産党が、そういう指令を出すかという理由は、やっぱり共産党はあくまで一九七〇年だかなんだか、決定的な闘争体制に入っていくまでは、共産党がいやしくも非合法的なことになってはまずいと、早く言えば。そういうところからきてるんでしょう、その方針はね。それはもっとわかりやすく言えば、要するに決定的な瞬間という途中で…。必ずしも学生が悪く言うように、へんな動機ではないと思うんだよ。多少そういう根拠はいろいろあると思うんですがね、あるんでしょう。しかし事実問題としてに、占拠の問題については、ぼくも最初、どうだろうというふうに思ったんだけれども、この間の東大の幕切れを見ると、どうもやっぱり…あの最後の民青のやり方というものに、全く根拠がないね。あすこでもう少しなにか根拠のあるものを示せば、なるほどそういう理由であったのかということはあるけれども、最後はどうも全く…それじゃどうして賛成したんだか、自分でも反省しているようならいいんだけれども、反省も…

E　東大闘争がああいう形で終結した、あのレベルで京大の今度の闘争が始まったんですね。だから民青のほうも、東大のあの結末における対応の姿勢をそのまま京大でも展開してきますし、国家権力の側も弾圧としては、東大のあれの延長線上に、さらにエスカレートするというような形で、京大のほうへのぞんでいくでしょうしね。

羽仁　だから、そこのところの民青の理論も、もう少しこっちも研究したほうがいいと思うんだ。なぜそんなに占拠に反対するのか、それは聞いてみたらいいじゃないか。東京でも盛んに聞いたらしいんだよ。日大ではまだ初期の時代だから、出ていこうというときに、おい、出ていかないで一緒にやろうじゃないか。ことに日大はいままで全然自治会活動ができなかったから、そういう分派があんまりなかった。つまり全く弾圧されていたんだから。だからまだ話し合いがわりにできたんだ。東大なんかじゃ全然接触がないようになっちゃってるからだめだけれども、日大はまだそれほど分裂がひどくなかったんで、説明を聞いたらば、おれたちも実はよくわからない。ただ指令で出ろと言われるから、出るんだということなんだよ。日大は万事模範的なんだね。そして、みな聞いてるほうは、ばかみたいじゃないか、指令で出ろなんて（笑）。大学生ともあろうものが、指令で出るなど…労働者だって、このごろ指令ばっかりで動きゃしないだろう、なんてったんだけれども。だから京都大学の場合には、いまおっしゃるように、そっから始まるんだから、こっちもそっからなぜ占拠するのかというのを、相当公開討論で、学生の前でやったほうがいいね。

D　一つ、やっぱり根本があって、大学の危機ということでも、危機感の内容が全然違うということですね。

羽仁　抽象的に自治を守るというんじゃなく、実際学生が自分たちの希望が入れられるような形で、大学の体制を変えなきゃだめなんだよ。いままでの体制じゃ、幾ら入れるといったっていかない。過去において五者協議会だ、八者共闘なんとかって、東大だって、京大だって、何度やったかわからないんだよ、二十年ぐらい前から。これで学生の声を聞くとか、いままで参加という言葉はあんまり使わなかったけれども、学生にも十分意見を聞いていってということは、耳にタコだよ。だけど絶対にどうにもならない、変わらないんだからね。それは敗戦直後の大学復興会議のときから、そうなんだ。京都大学の実に古い寮があるよ、畳が抜けちまったようなやつがね、いまはないんだろうけれども。そこへぼくは参議院議員のとき、学

生に呼ばれて、そこへ学生が大学の当局、学長だの、事務局長だのを呼んで、ぼくら参議院議員が、学生の言うことが正しいか、学校の言うことが正しいか、現場でやろうと。実際、腐っちゃって、こうやればガタッと抜けるような畳の寮なんだね。これを改築しないというのはどういうわけだということで、大学当局も参っちゃって、すぐ改築するということになったんだけれども、いままでは腐りかかった寮だから、学生の思うとおりにやらせてたんだよね。今度改築すれば、全然学生に管理権がないというようになってくるということなんだ。だから、なぜ占拠しなければいけないのか、占拠しないで、どういうふうに解決するんだというところから、民青の人を指令なら指令でということで、学生のみんなにそれがわかったほうがいいな。

反戦労働者と学生の結合

C　ぼくなんか労働者なんですけれども、労働者の場合だったら、工場占拠というのは戦術になっちゃうわけですよ。ところが学生の場合は団結形態じゃないかというあれがあるんですね。というのは、労働者の場合には占拠しなければどうしょもないわけですよ。ところが学生の場合は占拠しなくても、ある程度学校闘争を積み上げることができるという、占拠そのものが直接の目的にならないということがあると思うんですよ。たとえば占拠した後の講座なり、そういうことのほうがかえって問題で、労働者の場合は占拠して、全然違う製品をつくるかと、そんなことはないわけで、そういうあれが違うと思うんですけれども。

D　自己規律とか自己決定とかいう点においてはね、同じですね。あるいは自己管理といってもいい。

羽仁　もう一つストライキという方法が、だんだん効力がなくなってきちゃったんだよね、労働者の場合にも、大学の場合にも。前は学生がストライキをやるというと、当局がひっくり返って驚いて、言うことを聞いたんだけれども、このごろはやるならやれというわけだろう。やられたって、ちっとも痛くもかゆくもねェというふうに、ストライキ戦術というやつが、全くもうカビがはえたようになっちゃって、だれもなんとも思わない。新聞でそれをたたいて、学生はなんでストライキをやってんだ、労働者はなんでストライキをやってんだというストライキの非難を、マスコミでやらせる。そうすると、やってもかいはないし、労働者だって学生だって、実際は働きたいし勉強したいんだから、労働者もあんまり長くストライキをやってると、することがなくなっちゃって、やっぱり学校へ行ってみようか、工場へ行ってみようかということになっちゃうというふうに、ストライキは全然益がなくなっちゃったんだな。それで占拠ということになってきたというのが、第一の理由だと思うんだな。

第一次大戦後のイタリーの革命が、工場占拠ということで始まってきたんだが、それが最近は全世界的に学生運動の面で、それが出てきたんだね。その第一次世界大戦後のイタリー労働者の工場占拠というやつを、ひっくり返すために、ムッソリーニのファシズムと

いうやつが出てきたわけなんだ。

D　やはり現在の労働者の運動の場合、ストライキをやるというのは、非常に困難になっている。というのは、たとえば大きな総評とか同盟なんたが一時間ストをやるとか、ああいうことはなんともないんですけれども、中小企業において……

羽仁　いや、時限ストというのは、ストライキと言えるかどうか。

全員　そうですね。

羽仁　ていさいみたいな……そんなことを言っちゃ悪いけれども。

C　ぼくは出版関係なんですけれども、東京で新興出版と東京書院が警察にやられていましたね。あれなんかも結局、ただストライキじゃなくして、どんどん、どんどんいろいろなところを押さえていくということをやらないと、これは生きていけないわけです、事実上。そういうことになってるわけですね。だから職場放棄することになる。

羽仁　日本でも敗戦直後には、生産管理ということをやったんだ。その生産管理が合法なりや非合法なりやということで、大学の法学部の教授がずいぶん討論している間に、もう合法、非合法がぶっつぶされちゃった。第一次大戦後のイタリーの工場占拠、それから今度の第二次大戦後の、日本の敗戦後間もなくの生産管理というようなやつが、いま大学の学生の闘争の上に出てきているんだね。

E　そうですね。

D　現在、C君は地区反戦でやっているわけですけれども、関西の労働運動というのは、安保以後ですけれども、非常に地道な活動を続けていますね。それがようやく地区反戦という形で、実ってきているわけです。中小都市各地にもできているんですね、いま。私の住んでおります所でも、もちろんやっておりますし、大阪、京都、神戸、和歌山を結ぶ各地区に数多くの反戦青年委員会が進んでるわけなんです。これが一つ現在問題にならないとはいえ、戦術的には占拠、特に生産の拠点を押さえる。最近の生産というのは、ある程度流れ作業になる、分業ですから。その最も肝心かなめのところを一発押さえれば、機能が麻痺するというところがあるわけです。まだいまのところは、実際向こうのほうが先手を打っていまして、公安警察なんかと連絡をとりまして、反戦活動家に個人的に攻撃かけて配転などやってくるわけです。もう一つ大学との関係で言うと、本来、大学というのは人民のものでなきゃならないものですから、当然闘争の過程において、青年労働者と学生、いわゆる青年というものが横に連絡して結合していく。多様な形で結合していくということが、一番大きな問題になると思うんです。東大なんかは最終局面において労学提携というような形になりましたけれども、特に、関西においては、これはおそらく反戦メンバーは、京大なりどこなりへ入っていく。そこで一緒に討論をし、集会を開き、という形になっていく。占拠の場合にもおそらく参加する。東大の場合でも関西の労働者が相当多数行っておりますし、それがまず第一点ですね。

体制内統合＝「万博」の位置

それからもう一つ、関西の客観条件として大きなのは「万国博」

の問題です。これは、きのう工学部の諸君なんかに聞いてみますと、やはり委託研究といいますか、これが非常に大きい。特に建築とかそうですね。しかもその万博のイメージだとか、思想的には近代化論だとかいう形で、人文社会科学系とも結合してきた。したがって万国博問題というのは、これは学問領域から言うと、いままでは専門別個だった領域を、政府あるいは資本のヘゲモニーでもって統一してくる。こういう方向ですから、全く体制的な形で出てきている。大学との関係で言えばそれですけれども、近畿地方住民との関係から言うと、非常な公害を誘発するし、労働力需給関係から言いますと、万博へ労働者を非常に集めていく。おそらく今年度は突貫行事ですから、非常な需給関係のアンバランスになるという関係がありますから、これは非常に大きな問題です。いままでほとんど万博を取り上げているところはないんですけれども、関西の特殊な闘争の条件として、客観的に分析し、われわれの理論の中に組み込む、これをやる必要があると思います。

E　きょうも工学部の大学院の人が言っていましたけれども、万博で政府が一応出している何人来るぜというあの数字、だいぶあげ底があるけれども、専門の理論で計算してみたら、あの半分ぐらいしか来んだろうということらしいですね。そういうイデオロギー政策として、ああいうふうにあげ底を言うて、宣伝しているという面がある。そういう構造を暴露せんならんあきませんね。

D　とにかく客観的な、いわゆる経済的な問題も、それからイデオロギーの問題も、学問の細分化の問題に関しましても、万博というのは非常に大きな資本の、あるいは国家の祭典、国民の統合という形で出ていると思うんです。その意味では全くの秩序、あるいは体制そのものだというふうに思うのです。ですから現在の大学問題が大学の自治というぐあいに、単にお情けをもらって参加させてもらうというふうなことでは全然ない。まさに問題は…

羽仁　意見を聞いてまわるだけじゃ、全く意味がない。実行していかなきゃね。それは事態そのものが変わったわけだ。野党が討論することは自由だけれども、与党は全然…騒いどきゃいいんだ、いろいろ反対論をぶたしておいて、それで中間報告をやって、採決やりゃ、それで通っちゃうんだから。これが一般国民に非常にわかりやすいことで、幾ら反対をして、言論の自由だと言っておって、その反対を全然取り入れないという問題はね。万博はね、この間からヨーロッパで映画だのなんだの、ビエンナーレとか、至るところへフランスの学生があらわれて、みなだめにしちゃうんだ。あれには相当の根拠があると思うんだ。日本の政府はまだわりに、それを警戒してないんだろうが、そういう形をとってくれば、日本でも同じ事情があるんだろうから、当然あれをぶちこわすという動きが、至るところから出てくるだろうと思うんだね。ことに芸術家関係みたいなところからね。だからそれを予想して、大学の闘争と、それとの関連ということも…。去年のフランスの五月革命というのから学べることは、いろんなことがあるけれども、その一つは互いになんの関係もなくやった。もっとも現在はゲリラの時代だから、関係もなくやるということにも、ずいぶん個性的な意味があるんだが、しかし関係がないように見えて、関係があるということが必要だと思うんだな。機械的に無関係にやってるのは、全く意味がない。ゲリラでもなんでもないと思うんだな。

D　その意味では多様な…

羽仁　それで政府のほうは、この前の愛知が代表のときに、一九七〇年は安保の年じゃなくて、万博の年になるんだということを、宣伝　いるわけなんだ。向こうがそういうふうに問題を出してくるという　は、同時にこっちがそういうふうに問題を、安保をぶっつぶさなきゃならない。安保をぶっつぶす意味の万博というものは、ぶっつぶされなきゃならん、裏返せばね。

D　しかも、いわゆる市民運動として展開する可能性が…

羽仁　万博をぶっつぶす動きが出てくれば、日本の政府としては国際的に恥さらしだから、機動隊を全部万博のほうへ持ってくるよりほかないということになっちゃうだろうな。それで、きょうの夕刊のニクソンの就任式というやつは、全く模範的だと思うんだな。アメリカでもああいうふうに、実に偉大なるアジテーターがいたわけでもない。自然にああなっちゃうんだ。日本でも自然にああなるんだな。

D　それをある程度意図的に、こちらがたとえば資料として、きちっと押さえておくということにならないといけませんね。

羽仁　いまの映画だのなんだのにしても、なぜ去年あたりからフランスでも、イタリーでも、ドイツでも、映画祭はみなぶっつぶされたのか。あのぶっつぶした理論というのは、どういうものなんだというようなことは、もっと啓蒙したほうがいいね。

反大学＝人民大学創造の運動を

D　それともう一つ大学論の中で、自治という本来の意味は、羽仁先生がおっしゃったとおり自己決定権であり、したがって裁判権、司法権も含むものと思うんですね。学生の自治と言った場合、自治というのは与えられたものでは、すでに自治という概念からはずれると思うんです。ですから現在の代々木のやり方というのは、教官と一緒に仲よくやっていって、機動隊の権力が入ってこないようにする。ぼくはむしろ逆で、学生自体が機動隊の権力と直面する。その中で初めて自治が守れるか守れないか、こういうのがほんとうの自治だというふうに考えるわけですが、そういう形からいくと、当然現存体制内部での大学というものを、うまく利用するというところには、やはり限界が出てくるに相違ないと思うんです。ですからその場合、これも羽仁先生が書いておられたわけですけれども、中世の場合、どうしても対立が起こったときには、そこを引き払って、別個に大学を自分たちでつくるという人たちか、加わってつくる。これはやはりわれわれの場合にも、絶対必要な理念だというふうに思うわけです。

羽仁　それはいま内部的に萌芽というか、芽のように自主講座というものが始まっているんだが、自主講座というのは、どうしても昔の自主講座みたいになっちゃうんだね。日本大学では今度は自主講座とは言わないで、反大学というふうに言ってるんだがね。もっぱらぼくを呼びにくるんだが（笑）、反大学というのはできるかで

きないかと言うから、そんなものできないにきまってる。できないにきまってるようなものをやるという人間だけがやれ。できないときまってるものはよそうというやつは、初めからよしたほうがいいと言うんだよね。だってコロンブスがアメリカを発見したと言ったって、アメリカがあそこにあったのを見つけたんだから、発見とは言わないんだよ。だから新しい大学をつくって、なにかあるものなら発見とは言わないんだ。ところが自主講座というのは、どうしても昔のタイプになっちゃうんだね。あれは全く意味がないんだよ。そんなもの長くは続かないし、おもしろくもないよね。それなら普通の大学へ戻しちゃったほうがいい。そういうことになっちゃうんだから、そういうような自主講座はだめだな。

D　だめですね。

羽仁　だから学生主体のものをつくらなきゃ、だめなんだ。

D　私たちは一九六四年から大阪労働者学園を始めたわけです。これが細々と、とにかく四年間、五年間と続いてきた。これは非常にささやかなもので、幾度かやめたいと思ったほどですけれども、それが去年から地区反戦が非常に勃興した段階で、とにかくもはやぼくらの運動を乗り越えようとしている。つまり各地域においてやっているんですね。反戦でね。ぼくたちもそれに従って、運動が拡散というか多様化しまして、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりという形で、やり出したわけですけれども、そこでぼくたち一番強く感じることは、高校を出た労働者とか、若手青年労働者が、どれほど、ほんとうのことを知りたがってるか。知識欲というのが、非常に強いということを感じます。これはやはり現在の大学生の場合も、全く同じだと思うんです。ほんとうのことを知りたいんだけれども、全然言ってくれない。これに対して、やはりアンチをかけるということが、どうしてもこれは、関係として出てくるわけです。反大学というのを、もちろん建物が大学ではないわけですから、青年労働者と学生を中心にした運動というものに展開しなければならん。この労働者学園運動の過程で、ぼくたちが一つ考えたのは、単なる啓蒙ではない。これは教育する者が教育されるわけですから、逆に教師というのは、若いぼくらみたいな者ですけれども、絶えず自己否定を迫られる。こういう過程において、インテリ層そのものの組織というのが必要ですね。

学問の構造の変革を

C　ぼくも京都の学園の生徒なんですけれど、ごく少ないんですが…。ぼくら労働者が学園の闘いに参加していく中で、かっては学生はブチブルで労働者が主体だと言われてきたわけですけれども、いまは逆なんですね。いまの学校の荒廃を労働者がいかにとらえていくかということ、これが問題だと思うんです。そのことは、労働者がたとえば職場を部分的に占拠するといった仕方でも出てくるのですが、それだけではなくて、逆に労働者が大学へ入っていって、討論したりするというようなことも大事なことだと思うんです。大学が占拠されていて、自主管理されていて、自主講座が開かれていて、そこへ労働者が入っていくということですね。そういうものが

ある意味では、本当に大学をつくることになるんではないかという感じがするんですけれどもね。だから労働者は、現在の大学の闘争を、自分の問題として立てていかなければならないと思うんですね。

羽仁　それが結論的な問題なんだがね。ぼくの『都市の論理』は、そういう点の結論を出したものなんだが…。どうしても学問の本質と性格を、全く新しく考えていかなければならない。労働者教育というのは建設的なのは向坂逸郎君がやっとるようだけどね。実際に効果があがっておるとはいっても、どうも問題なんだね。今度のぼくの『都市の論理』というのも、ぼくはあんまり自分のことはとやかく言わないで、とにかく自分の気持を出してみたんだが。現在まであらわれているのは、たとえば茨城大学、これは労働者を技術者に養成する学校で戦後大学になったんだが、だからあの辺に集まってくるのは農村の次男、三男といった人たちなんだね。それを教える講師が、そこの教養を教えるときに、どうもいままでの教え方をやったんじゃ全く反応がない、受付けもしないという。効果がないんだね。そこで考えて、ぼくの『都市の論理』をみんなに読ませたところが、非常に効果があったんですね。それで彼が教養学部の一年、二年にレポートを書かしたんだよ。そのレポートが実におもしろいんだね。つまり講義のわからない部分は、いままで自分の頭が悪いと思ったというんだよ。ところが、この本を読んだら、頭が悪いのは教授なんだということがわかった（笑）。それでいままでやっていたことがナンセンスだったことがわかったというんだね。

それから、大学を卒業してどっかで働いている人たちは、自分たちは大学で四年間何を学んできたんかと、何も学んでいなかったということがよくわかったという感想が、ずいぶん来ているんだね。そういうような形が学問の新しい形だと思うね。大学の運動と労働者の運動と双方でつくり出さなきゃ。実際にそういう面を持っているんだから。ところが新しい学問とか新しい高等教育というものはどういうものかということは、いま、これからつくっていかなくちゃならない。どうも『資本論』を解説するとかなんとかいうのは、第一、労働者が退屈しておるわけですね。それで学問の構造というものが、どうしてもかわっていかなければならない。今度の闘争の中で非常にあらわれてきているのは、学生がかなりレベルの高い理論的な問題を日常の闘争の中から発見してくるということですね。

D　同じことが労働者にも言えるわけですね。その効果をもったのは、やはり労働者が街頭に出て実際に機動隊にぶつかって帰ってきたという…、帰って来たときに、はたして何のためにあそこにぶつかったのか、確かにあれが権力なのだということは実感としてわかったけれども、しかしそれだけではなかったかという問い返しが自分に出てくるんですね。そうしますと、非常に原則的なことがちょっと入ってきてるんですよ、論理として。これが重要な感じがしますね。

C　そういう意味では、ぼくらの場合でも学習会やっているんですけれども、ただ継続して本を読むというだけでは駄目なんですね。デモをやって機動隊とぶつかったりしているうちに、必ず「国家とは何か」という根拠をつかざるを得なくなる。単に一般的に国家ということではなくて、まったく労働者にとってリアルな問題として出てくる。

羽仁　それは実践で経験してぶつからないで、ただ継続したんじゃ国家論なんてものはやけに複雑なものだということは、ほんとうにそうですね。それでもぶつかってみりゃ、ああ、これが国家かということはわかるんですね。そうなると今度は、国家とは何かということを、もっと考えるようになる。向坂君なんかのマルクス主義も、実践において、国家なり何なりにぶつかり合うということを前提としていないところがあるんだな。

E　アカデミーに出された理論をかみくだいて、労働者に知らせてやるというやり方では具合が悪い。

D　それでは本来革命的なものであっても、革命的ではなくなる。

羽仁　それは、マルクス主義が覚えるマルクス主義になっちゃったんだな。政治の過程で鍛え上げられるとか、あるいは自分の体験を通じての理論というものにならないんだよ。体験する前に認識をいくら積み重ねてみたって、退屈するばかりなんだね。そういう学者が大学の中の最も進歩的な学者とされているんだね。

E　そういう意味で大学闘争というのは、やはり知性なり学問そのもののあり方を革命するということなんですね。

D　学生の出した問題というのを、一つは研究の問題として受けとめられねばならない。反大学とか批判大学という運動も、研究そのものへの問いかけと結びつかねばならない。まあ、進歩づらをした人であれ、保守的な人であれ、現在の大学の中で、学生の出した問題にまったく無自覚な教官そのものを否定すること、この運動を内在的に研究とは何かと、学問というものを一体どう思っているのかと、こういう形で提起しなければならないと思うのです。

羽仁　それは第二次大戦中から出て来た問題なんだよ。つまり戦争に抵抗できない学問じゃいけない、ということなんだな。それで第二次大戦中に、レジスタンスをやった連中の中から、そういう新しいインテリゲンチャみたいな人間が出て来たわけだな。サルトルみたいなね。

矛盾の焦点＝高校生

（高校生G君の報告。生徒の自治組織の形骸化。生徒会活動・サークル活動が形式化され、実質的にあらゆる権利が剝奪され、指導という名でもって完全に抑圧されている状況が報告された。さらに学校と親からの抑圧の中で、高校生自身が反発能力さえ喪失していっている状況が報告された。）

羽仁　いまの高校生の問題は、現にぼくが今度京都へこれたのも、君がいま言ったとおりで、ほんとうはあした横浜の希望ケ丘高校というところの生徒が、ぼくに話にきてくれということで、学校も大体了承して、ぼくも承知して、あしたはそこへ行くはずだったんだよ。そしたら二、三日前になって、突然それを延期ということになったんだね。それが延期にならなければ、ぼくはきょうこっちへこれなかったわけなんだがね。そういうふうに、もうすでに決定したようなものまでくつがえされちゃう。さっき君が言った先生の言いなりほうだいになるということじゃない。先生も一応了承したのに、

それがあとになって、またひっくり返っちゃうんだね。

G　たとえばビラの問題でもね、ただ生徒部の雰囲気が……。生徒部に検閲され、もう生徒会までが、そういう検閲をして、内容まで監視してくるという状態で、ほんまに監視するあれがあるのかというたら、全然そんなものないのやね。なぜ検閲するのかというたら、生徒部の……

羽仁　いま一番問題になるのは、生徒の新聞だね。新聞に対する検閲だ。新聞を出さしている以上、検閲をやるんじゃ、新聞なんかつくってもおもしろくないんだよ。大体全国のいまの高校は戦前とは非常に違って、高校でも生徒に自主的に新聞をつくらせる。そういう費用とかいろいろの材料とかいうものは、学校が供給するというところは、敗戦で、時代が進んできたんだな。また新聞をつくる以上は、自由につくらなきゃ、新聞をつくる意味がないんだから、検閲をするという規則はないんだよ。しかし実際上においては、この原稿、おまえもう一ぺん書き直してみないかとかなんとかいうことで、事実上は検閲になっているんだ。

G　クラブをつくるときには、顧問がいるという、そういう形で顧問がいない限り、なにもできない。

羽仁　それがなぜ顧問であって、クラブの指導者でないかというのは、やっぱり自主的には決定するんだ、と。ただ顧問の意見は聞いてみろというふうな根拠しかないのに、実際は顧問でなくて、それが会長のようになっちゃうんだね。

G　そうですね。

高校生の自治の奪還を

羽仁　高校生の場合は、ぼくは問題は三つぐらいあると思うんだよ。第一は全国的に見て、高校から大学へ行くんじゃない人が、かなりあるわけだな。高校が最後の学校である。高校を卒業すると、社会に立つ人があるわけだ。そういう高校を卒業して社会に立つ人としては、高校は大学と似た意味を持っているんだ。社会に出る前の最後の教育なんだ。したがって半ば社会人としてやらなければならないようなことは、高校でもやったほうがいい。つまり大学の自治というのは、学問の自由ということと、もう一つは大学を卒業すると、社会に出ていろんなことをやるんだから、したがって大学の時代にいろんな自治活動をやる必要があるという意味の、高校は半ばは大学に入るんだが、数のパーセンテージは別として、いまの日本の制度として、高校というのは大学へ行かない人としては、最高の教育なんだから、それで社会に立つんだから、社会的な常識は高校で養成しておかなければならないわけなんだよ。そういう意味では大学の自治とは違うけれども、高校の生徒に自治を奨励しなければならないということになっているんだな。この奨励しなければならないというふうになっているというところに、いろんな問題が起こってくるわけだね。それで、その奨励するというのは、自治を学生が主張するというのとは違うというんだけれども、奨励しなければならないということは、結局において生徒が相当自主的に自治を

やらなきゃ、幾らやれやれと言ったって、おもしろくないものはやりゃしないんだよ。ただ、結局奨励しなければならないといっておいて、最近は自治がまったくなくなっちゃったんだね。だから新聞を出すといったって、みな原稿を出さないんだよ。それで高校生が生徒会をやっておって、逃げちゃうやつが多いんだな。それが現状なんだろうね。最近の最後のやつは安保闘争、それから警職法の改正のときに、ずいぶん高校生が動いたんだな。その反動でもって、自主活動を奨励していると、警察法の改悪というときに、高校生が飛び出してみたり、安保に飛び出していったりすると、奨励ばかりしちゃいられないというわけで、監督を厳重にしたものだから、最近は高校生が自主活動の熱意を、失っちゃってるということなんだよ。高校生が自主活動に熱意を失っているというのは、逆に考えれば、やっぱりごまかしの自主活動ならやらないということなんで、それはもう一つ裏返せば、自主活動の要請は、高校生には、ぼくはあると思うんだよな。

G　むしろ強いんじゃないんですか、大学生よりも。

羽仁　それは第一だな。

C　高校のオーナー組織があるんですけれども、生連協という生徒会の連絡協議会になっています。かってぼくはそれの議長をしていたんですけれども、そういう連中はぼくも含めて、結局、生徒を指導してやるんだという形で、なにをやっているかというと、実際には学校のさまざまな機関の末端になっちゃっているんですね、いろんな奉仕団体の。これでは絶対に高校生はついてこないわけですよ。こんなものをしてもらいたいと、決して思ってないんです、高校生は。もっと違うことを要求しているわけですね、生徒会というのに。ところが、そういうことをさせない体制というのか、完全はできちゃってるわけです。それは新聞の問題でも、ぼくらは好きなことを書けない。

羽仁　だから逆に言えば、中学校と高等学校とどこが違うんだというふうに比較してみれば、わかるわけだ。中学校の場合には、まったく教師が指導するんだよ。だけど高校になってくると、高校生は自主的に活動しろ、ただそれで、まだいろいろ不十分な点があるから、とんでもない間違いをやりそうなときは、先生は、ああいうふうにしたらいいじゃないかとかいうような、顧問としての活動をするという、そういう点の問題をはっきりとらえていけば、大多数の生徒でも、やっぱり関心を持つと思うんだな。だって世の中へ出るんだ、間もなく。まるっきり自分の判断もできないようなまんまで、世の中へ出ちゃって、どうするんだということは、自分でも考えていることなんだな。

受験制度との闘争を

G　組織の中では一応八〇％以上が大学へ行く。活動家の中を見ても、三年生になれば裏側のことしかできないようになる。就職するにしても、高校から普通の労働者になろうと思ったら、三年生になると裏側に回ってやる以外にないというぐあいになってきているわけです。そういうところから見ても、活動家ですら、結局、高校生の自治とか、そういうものを捨てて、勉強に打ち込まなければ、大学に入れないという現状が出ているわけやね。

羽仁　そこで第二のいまの問題に移るんだが、つまり高校生の運動が今後盛り上がるとすれば、現にそれが大学の闘争へ出てきたんだけれども、これは新聞やなんかも逆の意味で言ってるだろう。大学闘争があんなに激烈になっちゃったのは、受験、受験でもってずうっとやってきた結果、大学までできたら、今度は試験がねェということになったんだから、なんで騒ぐんだということで、ゲバ棒を持ち出したというようなことを言うんだが、大学のいまの闘争というのは、ほんとうの問題は学問が受験用になっていることなんだよ。だから大学へきて受験用の学問では、もうまねができないんだ。ところが教授たちはやっぱり受験用のあれがあるんだよね。

A　教養学部というのは、全くそうですね。

羽仁　まったくそうなんだよ。教員の免状を取るとかなんとか、大学ではもう試験はないはずなのに、まだ受験…。つまり日本を受験地獄から解放するという運動が、大学のほうから出てこないんだけれども、高校生のほうから出てくる客観的な根拠はあると思うんだな。これが中学や、小学校ではとても無理かもしれないけれども、親たちにもやっぱり小学校から、受験勉強というやつはやめてもらいたい。受験勉強は人間をいかに下劣にするかということを、だんだん考えてくるんじゃないのかな。

B　大学の場合だったら法学部でも司法試験、ところが全然闘争が起こらないような、そういうような受験制度があることによって、自由な発言というか、闘争をぶちこわしている最も重要な要因になってくるんです。そういうことから、やっぱり大学闘争との結合というか、全部入れるようにしておくというようなことが、大学生は大学を管理しない限り、絶対不可能やし、そういう面から高校生の問題も進めていかないと…

羽仁　しかし資格試験というものは、お医者でもなんでも必要だ。資格のない人がお医者で、われわれの身体を見るんじゃ、あぶなくてしょうがないから。だから試験というものの制度を考える。ぼくはずいぶん前から言ってるんだけれども、学科試験だけをやるということは、非常に弊害があるんだよ。それで学科試験だけじゃなく、学科のウェートというものを、もっとずっと下げるということが必要で、現在は学科試験、しかも暗記的な試験だけをやるわけだろう。だから実際は資格試験にもなってないんだよ。そういう意味で試験制度の問題というのは、きょうはおそくなっちゃったから、そいつをあんまりやってるわけにいかないんだが、高校生はずいぶんみんなで問題にしたほうがいいと思うんだよ、受験勉強ということを。そして、それはある意味では、親もその点で初めてわかってくるわけじゃないかな。親も受験勉強ばっかり子供にさせているということが、いまの親は、ほとんどだれも疑問を抱いていないんだろうな。とにかく子供が机に向かって、なんかやってりゃ、ああ勉強していると思ってるんだな（笑）。よく考えてみれば、これは子供をだめにしている。一番悲惨な…その結果が日本がこのような実にひどい世の中ができちゃうんだから、受験勉強の結果ね。だから高校生の場合には、第二の問題は受験勉強の問題だと思うんだな。そして、その受験をして入る大学が、どういう大学かというと、いま大学が

みんなの前にさらけ出しているわけだな。まあ去年ぐらいまでは、やっぱり東京大学なんというのは、いい大学だと思っていたやつが多いんじゃないかな（笑）。それが最近になって、もう東京大学というたら、とんでもないところらしいということが、大体わかってきちゃった。

大学闘争から高校闘争へ

G　一般にそういう具合にわかってきたけれども、高校のいまの状態を見たら、いまだに東大はええんや、京大もええんやと、そういうぐあいに、東大にあんな問題が起こったかて、なにも本質的には変ってないんだ。そういうエリート意識なり、東大を一番で出てるんやと、いまだに幻想を抱いているわけやね。

羽仁　幻想を抱いているけれども、東大は現に入学試験ができないんだ。それで京都大学へ回るというと、増員お断わりというわけだろう。その人員をかりに回せば、この京都大学で争議が起こっちゃうということで、当分高校生は大学には入れなくなる（笑）。ぼくはおとといの大阪大学で、東大に機動隊が入ったとたんに、全国立大学がストライキに入るということが、当然だろうといったんだ。東大に機動隊が入ったんだから、おれの学校に入ったわけじゃないというような頭を持っているやつは、大学生の資格はないというんだ。隣のうちが燃えてきたが、おれのうちはまだ燃えてるわけじゃないというて（笑）酒を飲んでるやつは、どうかしている。（笑）。

それをぼくがギャンギャンアジったんで、直ちにぼくの話のあとで、封鎖ということになったらしいんだが、ぼくはアジるわけじゃなくて、客観的に日本の大部分の大学は、占拠状態に入っちゃうよ。だから高校生はいまはいいんだよ。いまはどっかへ入るつもりで。絶対どこへも入れない（笑）。そうなったときに、高校生はどうするんだと言ったら、やっぱり受験勉強と大学ということを、おれたちも考えなきゃだめなんだ。つまり、なんか大学というものがあって、そこへ入ればいいというふうに思ってたことは、そのときに全国の受験生が、またこの問題を考える役なんだな。いま受験生はブーブーブーブー言って、おれはせっかく勉強して、試験を受けようと思っているのに、大学はどうなっちゃったんだと言っているけれども、決定的に大学がことしは入学試験がないということになると、受験生は一体おれは来年もこんなことをやっていいのかということが、現実の問題になってくるね。だから全受連みたいな、受験生の全国連盟ができる必要が、客観的にはあるんだな。

教育体制との闘争を

最後は、高校生の問題は、実は教師の問題なんだよ。つまり勤評以来、教師はまじめな教育ができなくなっちゃってるんだな。だから君たちの意見を聞いて、教師もやらしてもいいなというふうに思っても、校長は、やらせると勤評で自分の点数が悪くなっちゃうから、やめておけ。羽仁さんのようなのはやめとけということになっ

ちゃってね。最後は高校生から突き上げていかなきゃ、勤評闘争を。いまは勤評を受け入れたことになっちゃったんだよ。これはやっぱり盛り返さなきゃだめで、勤評撤廃という運動が、どうしても日教組がやらなければだめですよ。勤評を無視したようなことを言ってるけれども、実際はやられているんだよ。

C　高校なんかでも、ぼくの高校はいなかなんですけれども、先生に会って話を聞いても、かなり進行しているようですね。実際に私学なんかの場合に。

B　それからもう一つ、ママゴンと言われている父兄…

C　それはやっぱり大学入試が中心になっている。それが大きいですね。

羽仁　だからママゴン群を退治するには、全国占拠するよりほかないんだ。大学がなくなっちゃえば、幾らおふくろだって、ないものに入れとは言わなくなる。（笑）。

D　そういう場合じゃなくて、まさにいまから、これは反大学なりを、ほんとうに真剣にわれわれの問題としなければならない…。

羽仁　だから、それは反大学というふうにいうと制度みたいに言われるから、あなた方若い学者が、新しい学問をつくらなきゃだめだ。それは実践と学問は別だということではだめだ。これは口では幾らも言われていたんだけれども、現実には今度初めてわかってきたわけだ。だって東大でこの間、林健太郎を返せなんて、シュプレヒコールをやった連中は、口先では相当のことを言ってた連中なんだよ。丸山真男であろうが。坂本義和なんて『世界』かなんかで、大いに平和論を唱えていた連中だ。加藤代行のあとくっついて歩いて、機動隊を導入しちゃったんだからね。つまり、ああいう実践と全く遊離した学問は、どれだけ進歩的に見えでも、現実にぶち当たれば、もっとも反動的な、自民党の荒木公安委員長と似たり寄ったりの考えになっちゃう。それは民青もそうなんだ。つまり実践に鍛えられていない民青というものは、荒木公安委員長と似たり寄ったりのものになっちまう。マルクス主義に近い思想でもそうだということなんだな。それじゃどういうふうにして実践で鍛えられていくかというだね。学生と労働者とが提携して、共同でそれをつくりあげていく。

最後に医学部の問題だけれども、結局医学部のインターンはだめだ、報告医もだめだ、実際どうやったらいいんだといって、ぼくは青医連の連中に聞いたら、実際的なのは、大学を卒業したら、無医村に行くことだと言うんだよね。そうすればあらゆる条件にあえると言うんだ。自分の全責任でやれる。こんなにいい勉強にない。しかし、これはいまの大学制度では絶対にだめだと言うんだ。自分が無医村に行ってる間に、いいポストをみんな人にとられちゃう。だれだって無医村なんぞに行ってはいられないと言うんだ。行ったって都会のポストのことばっかり気になって、無医村をやってる間に、みんなにいいポストを…しょっちゅうそういう考えが出て来て、早く呼び返してくれということで、無医村に行って、こちらへ来てるやつは千人に一人ぐらいしかいないだろうということなんだ。これはやっぱり大学を破壊しなきゃ、無医村に若いお医者が行くということもできないんだな。そうでなきゃ毛沢東先生みたいに無理やり無医村に行けと、無医村に追っ払うよりほかしょうがないという

ことになる。そういうところまで考えがいくわけだな。だからどうしても特権のついている大学というものは、破壊しなければだめなんだ。

D　労働者の実感としても、ちょっと話し合ってみれば、東大がつぶれて、ぼくになんの関係があるか、なにも関係がない。むしろあれがなくなったほうがいいと。これはほんとうに実感として…。

羽仁　大学にいくチャンスのなかった人は、東大なんかぶっつぶしてしまえ。あれは乱暴な議論のようだけれども、実際は民衆となんの関係もない大学なんだな。

C　ぼくは大学へ行ってないんですけれども、ああいう大学というのはだめだという考え方…

羽仁　自分が入るかもしれないと思えば、おいといたほうがいいというけれども、関係がないものは、ぶっつぶしたほうがいい。

A　次は京大のほうだな。

高校をぶっつぶせ

G　ぶっつぶせという観点から見た場合に、高校もぶっつぶしていくべきか。そういうぐあいに大学と同じようにとらえるべきなのか、その特権を与えるものとして。高校卒という証書をもらえる所だしね。同じ観点から見ていくか、それとも違う観点で見詰めるか。たとえば大学で闘争をやってる人が言うのには、高校ぐらいの勉強はやっておかなあかん、それでも役に立つんや。そういう言い方をすれば、なにも大学もかわらないと思いますね。しかし、いまと同じとらえ方をすれば、高校も同時にぶっつぶしていかんならん。大学生が生まれてくる、そのもとの高校からぶっつぶしていくということになるように感じます。

羽仁　そのとおりなんだ。いま高校で教えてるような教育は、実際社会に出たら、なんの役にも立たないんだ。だから高校もぶっつぶさなきゃだめなんだ。いまやっておるようなものだったら、中学からの延長みたいなもので、中学でやっちまったことを、ただ繰り返しているようなものなんだ。そんな高校ならぶっつぶしちゃったほうがいい。それには高校の教師の待遇をよくして、教師に能力がなければ、そういう高校らしい教育はできない。だからいまの高校というのは、全くごまかしだよ、あれは。しかし実際、今後ますます機械化、産業の高度化になってくるというと、高校の卒業生というのは、中学校を出てきた労働者よりも、役に立たないということになっちゃうわな。高校を出てきた連中のほうが役に立たんということになっちゃうような高校なんだな、現在。これはやっぱり高校生自身が、先生にまかせておけばいいと言っちゃおれない問題だと思うんだ。

D　まだまだお話を聞きたいんですけれども、もう、先生、お疲れでございましょう。今夜はこの辺で終わりたいと思います。

あらゆる理論は　アジテーターである

——デカルト——

1969. 3

占拠の論理

羽仁五郎全関西講演集

編集・発行
関西大学生活協同組合
〈書評〉編集委員会
吹田市千里山１７
ＴＥＬ 06－388－7641